
桜ノ宵二

廣瀬 るな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜ノ宵二

【Nコード】

N0007E

【作者名】

廣瀬 るな

【あらすじ】

出戻り女の恋愛事情。それは愛なのか恋なのか、それとも欲なのか……。誰にも分からない、怪かしの夜。

第一話 幸い

男に犯される夢を見た。顔は見えない、ただ、強い力。逃げる私と、押さえる腕。抗い、嫌を叫びながら組み伏され。逆光に鬼の様な髪が浮き上がり、見上げる虚空に黒い欲望が輪郭を現す。それはまるで桐箆箆を収めていたうすのろで大きな段ボール箱が倒れ、私を被い尽くしているかのようなだった。私の四肢は足掻き、バタバタと身悶え、地を蹴り、爪を立てる。

男に体臭はない。だって、夢だから。有るのは、

『重い』

そう思う気持ち。

「犯されている」

と言いながら、男そのものの肉感は無く。

『犯されている』

という感覚だけが肌の奥へと滑り込む。でも本当じゃない。現実じゃない。

「これは、夢」

頭の一部では分かっているから、朝焼けの光に向かって助けを求め

る。

「覚めろ！」

しかしその思いとは裏腹に、私は深淵へと引きずり込まれた。覚め損なった夢はまるで輪廻の様に繰り返し、男は私を縛り、多分だけれど、貫いた。

何がそんな夢を見させたのだろう。ぼんやりとした頭のまま布団の上に体を起こし、柔らかな羽を広げる肌掛布団の端を両手で握りしめながら、嫌悪感と同時に訪れる、安堵とも違うその感情を、私は持て余す。

それは、男だったら誰でも良いから、私を

“オンナ”

として求めてくれえる存在が有る事への安心感、という事なのだろうか。虚しいと、理解はしているつもりではあるけれど、33歳という年齢は私に微妙な揺さぶりをかけていた。

当然と言えば当然だが、身に付けていたパジャマにボタン一つの乱れもない。その就寝時と変わらぬ装いは、いつもの朝と変わらぬ穏やかさを告げていた。その上、下着の中の

“女の軀”

は露程も濡れてはならず、その現実を私は複雑な思いで噛みしめた。夢の男に種子は無い。求められても、実がならない。だったらいいその事、望んで全てを任せるべきだったのかもしれない、と。

“石女”
いしめ

それは私の称号なのかもしれない。大学を卒業した年に結婚し、10年。一度も子を孕まなかった女だから。

『ウ・マ・ズ・メ』

義母は正確にそう発音した。

『あなたは役立たずの石女ね』

でも私は知っている。みんなも隠している。彼女の息子で私の夫だった男は、あなたがお腹を痛めて産んだ子供じゃない。でも、言わない、心に秘している。

それで楽になるとしても、言わない。彼女に突きつける現実は、新しい火種を熾^{おこ}す事に他ならず、その時に私を守ってくれる人なんか居やしない。分かっていた。夫なんて、名前ばかりだ。

私が玉の輿に乗ってくぐった門は、先代が建てた瓦屋根を持つ総檜作りで、あの門を越えた瞬間、私は嫁いだ家の所有する所となった。土台に高い石垣を持つ塀は外敵から身を守る鎧さながらにそびえ立ち、夫と義母と三人きりの日々の暮らしの中、戦国時代という言葉を私に連想させてくれたものだった。

夫だった男の肌はまるで身ぎれいなトカゲの様に乾いていた。二

人の褥しとねは冷たく、そこに有るのはただ平坦な幾何学文様の羅列。石畳の中に押し込められた、それは感情ではなく、ただ生きているという惰性。

義務とはいえ、あの人に抱かれていて一度も感じた事なんか無い。産婦人科の待ち合いで手に取った女性週刊誌に掲げられた

“イケない女40%”

その数字は私だっと思った。

“愛の無い”

“思いやりの無い”

“男性本意の”

セックス。そして

“イケない理由”

“オナナの軀の未開発”

全てが私に当てはまり。名前を呼ばれた瞬間、両の手がそれを握り潰していた事に気がついた。だから

「別れて欲しい。」

いつもの様に食後のお茶を運んだ私に、最後まで

『ありがとう』

の一言を言う事も無く彼に告げられた言葉、

「僕の子供を産んでくれる人がいる。彼女は君と違って僕を愛してくれているんだ」

を耳にした瞬間、私の心に湧き上がったのは

『どうして？』

という疑問よりも、

『これでこの牢獄から逃げられる』

という奇妙な安心感だった。

かといってあからさまに喜ぶ事は出来ず、無表情を装い顔を強張らせた。すると彼は眼鏡の上から薄い眼差しを私にくれ

「思った通りの反応だね」

呟いた。

むずがれば良かったのか。

『別れたくない』

『10年も一緒だったのに』

『そんな女のどこが良いの？』

と。でもそれは、嘘だから。

やがて私は彼が何を言ったのか、言葉の本当の意味を理解した。この人で燃えるなんて、なんて幸せな女ひとなのだろうと。むなしさの様な、哀れみの様な、それでいての飲み込む事の出来ない口惜しさが口元まで迫り上がり、それでも私は

「子供が出来たんでしょう？ だったら仕方がないわね」
穏やかな声で頷いていた。

彼の表情は、安堵？ それとも未練のかけらも見せない妻への不満？ 少しは嫉妬して欲しかったの？ 笑っちゃうわ。

そんな、可愛くない女で有る事が、これまで得る事のできていたはずの幸せを拒む原因になったのか。でも私はそれを良しとする。私はこの男を愛せない。

最後の会話は

「桜の花言葉は

“ 淡白 ”

なんだってね。最初に知っておくべきだった」

良く覚えている。それはタクシーに乗り込もうとした私の背中に浴びせられた言葉。

諦めるというより、呆れ

『あなたじゃ、駄目だったのよ』

その言葉を飲み込んだ。言った所で、この男には響きやしない。

「そうだね」

私はシートに浅く腰をかけ、下げたウィンドウ越しに微笑んだ。今にも泣き出しそうな空の下、窓から流れ込む散り初めの桜の花びらが私の左手の薬指をかすめ、足下に落ちる。

「でも今度は、大丈夫、でしょう？」

もうすぐ彼の奥さんのなる女性は

“加代子さん”

「幸せになってね」

大人らしい社交辞令の上にほんの少しの真心を乗せそう言った。

幸せ。その漢字。由来は手枷。囚人を手枷でつなぎ、人々は安息を得る。私は

“結婚”

と言つ名の枷を外され、喜んだ。

第二話 生者と死者と

今時の病室の壁は白くない。

「じゃあね、また明日来るから。大丈夫よ、私の事は心配しないで」汚れても目立たない様、最初から斑ふの施された象牙色の壁紙。その中に混じる微かにこびりついた得体の知れない痣を私は見なかった事にする。

六台のベッドがひしめき合う広はずの大部屋をぐるりと見渡すと、初老の男性と目が合い、小さく会釈をもらうから

「私はお父さんの心配なんかしてないからね」

目を細めた父に笑いかけ、洗い物で膨らんだ紙袋を手にしち上がった。

『順調ですよ』

そう言われ、ナースステーションの横の個室から移って来たのは昨日の事。でも娘の私にはよく分る。回復はあまり良くない。理由なんか簡単。従兄弟の佐伯おじさまが亡くなったから。

子供の頃から一緒に育ち、住む家も近く。最近までよく二人で釣りに行っていた。一ヶ月前、胃癌の見つかった父はおじさまと縁側で碁盤と差し向かいながら

「次は自分だ」

と背中を丸め、大好きだったうぐいす餅に手をつける事も無く、

「私の代わりに食べてくれないか？」

辛党のおじさまの横に朱塗りの皿を差し出した。その人は

「ああ、御馳走になるよ」

蚊の鳴くような声で答え、ゆっくりと菓子を食んだ。そう、ゆっくりと、ゆっくりと。

「あの、お茶を」

私はおじ様の好みに合わせ少し濃い目に出した煎茶を差し出す。父の横には湯冷ましのお白湯。

「済まないなあ、俺ばかり」

がつちりとしていたはずのその体が、病気に蝕まれた父同様、すつと縮んで見えた。

そのおじさまが亡くなった。交通事故であつさりと。

『ちよつとその本屋に行つて来る』

そう言つて出て行つた帰り道での事らしかつた。

手術直後の父に悲報を伝えるのは心から苦しかつた。何よりも悩んだ、伝えるべきかどうかを。私は父が歳をとつてからの子供で、こつして出戻つた今、孫を抱く望みもない。その上大切なおじさまがいなくなつてしまつたことをこのタイミングで告げるなんて、父が生きていくための希望を摘み取る気がしてならなかつたから。それでも私は心を鬼にした。人が死んで、お通夜、葬儀が有る。例えば父や私が

『待つてくれ』

と叫んだ所で、声は届かない。それならば、と。

「今、父さんに言うべきじゃないって思つたけど。でもやっぱり言うね」

ほんの少しだけ起こしたベッドの上、酸素マスクの中で煙っている父の顔は妙に神妙で、

『覚悟している』

とても言いたげ。

“腫瘍は転移している”

と、私から告知されれると思つたのだらう。でも、違うから。

その瞬間、父の体は魂が抜けた様になつた。大きく見開かれた目の所為で、加齢で濁り始めた水晶体（黒目の事）が私の目に映り、今まで気がつかずにいた父の老化をまた一つ知る事になる。

“即死”

という言葉は避け

「苦しまなかつたそうだから」
の言葉を選んだ。

「どうして？」

戸惑う父に私は手を差し出し、その手を握った。ほっそりとした血の気の失せた手。乱れる呼吸とリズムを早めた心電図のモニター音に、父こそが危篤のようだと思った。それでも私は言葉を続けた。
「ねえ、父さん。葬式には私が父さんの代わりに出るから。私は、お父さんの、代わり、だからね？」

父さんが後悔しない様に。私も後悔しない様に。父は死なない、絶対に死なない。だからむしろ、おじ様が亡くなったという事実を知る時、それが風化した過去ではあってはいけないと思った。

ひんやりとしていた手がするりと抜け、私の手を握り返したかと思うと、それは力を強めた。

「頼む、頼む」

と。

「私の代わりに、私が行けない代わりに、あいつにお別れを言っ来てくれ、頼む、頼む」

私は

「分かっているから」

父さんの気持ちを受け取った。

「お父さんの気持ちをおじ様にきちんと伝えて来るからね。おじさまが父さんにとってどれほど大切な人なのか、しっかり伝えて来るからね」

あの父が、泣いていた。母が死んだ日も、癌の告知を受けた日も。何が有っても泣かないはずの父が泣いていた。

私の喪服には実家の山桜の家紋が染め抜いてある。嫁入りの荷解きをしている時、それに気づいた義母はあからさまに嫌な顔をした。
(注)

『不祝儀の上にあなたの名前が有るみたいで嫌だわね』

そう、私の名前は

桜子さくらこ

だから

『縁起でもない』

その人は形の良い眉を潜め、唇を結んだ。でも、それがどうしたというのだ。何も忌みごとが全てでは無いはず。

『私はこの家紋に誇りを持っていますから』

胸を張って口答えした私は、輿入れのその日からふさわしくない嫁と言われた。

あの時一緒に詠えた帯の地紋（織りの模様）

は流水に菊。私の大好きな花。伸びやかで気高く、香りも冴え冴えと、誉れとばかり咲き誇り。私とはまるで対照的な花。その一輪を愛でられ、株分けしようと人々が目の色を変える。

婚儀の時に持たされたその一式は、いつかあの人を送る時に着るものだとばかり思っていた。それまで私は平穩に暮らすのだと。今となつては、それは幻と消えたけど。

現実として、順当にいけば義母だと気づいた時、期せずして私は自分の本心を知る事になる。

醜い。そう思いながら、思わせた義母も憎ければ、止めもしない夫を家族だとは思えなくなり。

“男”

と縁の切れたこの一年を幸せだと思っていた。彼に会うまでは。

彼は伯父さまの次男に当たる。でも不意の事だから海外に住む長男は帰国が間に合わず、心臓の悪いおば様に代わり、あいにくの喪主。^{みぞれ}雲まじりの空模様に

「本日はお足下の悪い所を」

そう挨拶をする声は低く擦れ、遙か遠くの空で轟く雷鳴の様にひっそりと私の心に届いた。不謹慎と言われるかもしれない。私はその響きに雄の匂いを嗅いだのだ。

うつむく彼の整い過ぎていない無精髭が好い。シャープな顎のラインも、ゆっくりと移動する喉仏も、好い。うなじにかかる少し巻いた黒髪に触れ、そつと後ろに撫で付けたい。彼が言葉を発する、

その度に漏れだす慟哭が、私をじわり、

“オンナ”

に変えようとした。

伏せられがちの彼の瞳。くつきりとした睫毛がスローモーションの様に上下する。ひび割れた唇を舐める様に噛む仕草の後、彼は

「亡き父も、皆様のご厚情に感謝していると思います」
そう言った。

感謝、感謝、感謝。それは本心では有るけれど、本当は今はいえ
ないはずの苦肉の言葉。感謝、感謝、感謝。それどころか、

“死んだ”

なんて、そう簡単に受け入れられるはずがないじゃない？

「本日お集まり頂いた皆様に、亡き父に代わりお礼を申し上げます
と共に、どうかこれから未熟な私どもをご支援、ご指導頂きたく
よろしくお願い申し上げます。本日はお忙しい中をお越し頂きあり
がとうございました」

なんて月並みで、なんて耳障りの良い言葉だろう。本来悲しむべき
はずのこの場に立ち、私は皮肉にもそんな事を思った。彼は

“立派に”

乗り切る役目を背負い、それを遂行するために何かどす黒いものを
胸に抱えてる、そんな気がしたのだ。

だからなのかもしれない。そのまぶたの奥の感情を押し隠そうと
している瞳と、私の視線が合った瞬間、彼の捌け口の無い鬱積した
感情が私の中に流れ込んで来た、そんな気がした。

夫しか知らない。義務感だけの10年。

何がそう思わせたかは分からないけれど、今女にならないのなら
このまま枯れていくだけの野草だと思った。踏みつけられ、誰にも
顧みられる事の無い。種子を残す事も叶わず、それ以前に花を咲か
せる事すら望めないなんて……嫌だと。私の本心は、花として咲
き、愛でられたい。美しく咲き誇ってみたいと秘めていた。その本
能を彼は呼び覚ましてくれた。

かといつて行動を起こす事も出来ず。私は黒い割烹着に身を包み、丸めた背中ほそでそんな自分の臍ほそを噛みながら振る舞いのお銚子ちやうしを運んだ。

その夜独り庭に出た。

母が植えたというそのソメイヨシノは亡くなった今も健在で、大きく広げた枝の下に僅かに膨らんだ蕾を忍ばせている。享年38歳。その年私は8つ。女の何も教わず、ただ飯を食い、生き。今になり何も知らされていなかった事を悔やむ。自分が女である真価を。恨む。なんで私に何も残さず母は死んでしまったのかと。

『お雛様ひなさまってね、女の子のお祭りなんだよ』

記憶の中、手の込んだ編み込みの髪が揺れ、誰かが笑う。

『貝合わせかいあわせってね、本当はいやらしい意味なの』

多分、友達。

私は女雛めひなで、夫は主あるじ。全ては成り行き。店の隅に捨て置かれた埃被ほった私を、買得かと思つた客がいて。見合みあひいだった。写真の中の彼は正に男雛おとひなさながらで、決して男らしくはないその姿に私はむしろほつとして心を決めたものだった。これで、壊されずにすむ、と。それは半分は正解で、半分は誤算。私はただ、操られるだけ。着飾り、座つて、迎えて、眼を見開いたまま微笑無事が、全て。ひんやりと、血も通わず。壊されもしないが、生かされもしなかった。

注：嫁入り支度の一品として、喪服を仕立てる古い習慣があります。実家の家紋を入れるか、嫁ぎ先にするかは、その土地や習わしに依つて異なります。ほとんどの場合実家が負担する為、実家を選ぶ決定権がある様です。

第三話 男と女

月のものを怯えて迎えた。10歳だった私は独りトイレに閉じこもり、自分ではどうしようも無い、まるで疫病の様に広がった下着の黒い染みを見て、

『きつと何か悪い事をしたから、天罰が下ったんだ』

自分を責めた。このまま腐って逝くのかと思った。

西に面した半畳にも満たない箱の中は冷え冷えとし、窓から差し込む日差しとは裏腹に空気が凍っているかの様に思えた。

何とかここから抜け出さないといけない、その一心でショーツの中にたくし込んだトイレトペーパーがまるで巨人の手の様にごわごわしていた事を今でも覚えている。

「父さん、私、死んでしまいかもしれない」

トイレを後にした私の姿はがに股で、腰の曲がった老女の様によたよたと歩いた。

書斎で本を片付けていた父は私を見ていぶかしげな顔をした。

「なにがあつたんだ？」

と。そして打ち明けた私の言葉に浮かんだ表情は、あえて言うなら“戸惑い”

だった。それは予想していた事とはあまりにも違った反応で、私がかんなにも悩んでいるのに、父は何も聞いていなかったのかとさえ思う程だった。多分その時の私は、顔に怒りを登らせていたのだと思う。父は悲しそうな顔で

「学校では教えてもらわなかったか」

そう言った。

『何も習っていない』

即答が頭に浮かび、同時に何かが頭をかすめ

「あっ！」

息を飲んだ。小学校三年生の西日の強い午後だった。女の子と男の

子が別々の部屋に分けられ、

“保健体育”

の授業を受けた。正面には女性の体と妊婦のイラスト。ざわめく教室と一括する教師。

『皆さんの体』

先生は言い、解剖図を指差した。あの時教えてもらった

“月経”

というのが、これなのか、と。

うつむいた私に父はすぐさま母の姉を呼んだ。上品ぶったその人は「お手当しなければ」

と両方の手をきちんと前で組みながら話した。でも、どうやって？ 尋ねる私にその人はため息の後に答えをくれた。床から拾い上げられ手渡されたのは、藁半紙の袋に入ったナプキンのパッケージ。

「汚物はそれに含ませるのよ」

トイレに行く様に命じられ、裏に書いている事を良く読む様にと言われた。二人だけのリビングにいて、たったそれだけ。いや、違う。「だから男手一つで子供を育てるのは反対だったて、あれ程言ったのに」

の声を聞いた気がした。

その晩、叔母が赤飯を買って来てくれた。その意味が分からなかった。しくしくと痛むお腹を抱え、父の悪口を言われ。誰一人笑ってなんかいない食卓で、何が喜ばしいのか、と。

『これって、どうして？』

『何で男の子には無いの？』

尋ねる度に困った様にひそめられる母の姉の眉を見ていた。あまり母とは似ていない、世間体と義理だけで面倒をみてくれたその人は、子供はそんな事知らなくていいと、場を濁し。

それは恥ずかしい事なの？ それなのにどうしてお赤飯を炊いてまで喜ぶの？ 戸惑う私はなおも繰り返したものだ。

“オンナって、どう言う事なの？”

それを知ったのは18の夏の夜。中学からの女子校で、不必要に箱入りだった。生物学的な男と女の違いを知ってはいたものの、その現実とは分らずに。

「道を教えて欲しいんだけど」

その男は私が子供の頃からよく遊んでいた近所の公園の傍で声をかけて来た。

「初めての場所なのに、この通り暗くなってしまっていて困っているんだよね」

と頭を垂れながら、さも申し訳無さそうに黒い帽子のつばを撫で。

私は親切心から公園の中を通る近道を教え

「もしよかったら案内してくれないかな？」

の言葉に騙された。

その瞬間、見慣れているはずの景色が歪んだ。天地がひっくり返り、何が起こっているのか分からず、でも、殺されると思った。叫び、有らん限りの力で押し退けた。必死だった。気がついたら走っていて、目の前には馴染みの公園が広がっているというのに、網膜にこびりついた三日月が私を笑い、アリスの国を彷徨っている気分だった。

もしかしたらたつた今起こった事は

“思い過ごしかもしれない！”

そう思い込もうとさえした。しかしひりひりと痛む腕の傷、引きずり込まれた生け垣の柵の葉の痛みはまぎれも無い現実で。

「鬼がやって来る！」

私は人に助けを求める事さえ忘れ全速で走り、やがて息を切らし、それでも一秒でも早く逃げなければいけないと脚を動かした。

そして倒れそうになる寸前の私を抱きとめてくれたのは、大学帰りの彼だった。

「おい、大丈夫か？」

一瞬、あの男かと身構え叫び声をあげそうになり

「おい、桜子」

聞き覚えのある声に救われる。

彼はここに来て泣き出し、それを止める事が出来なくなった私を守ってくれた。

「大丈夫。」

そう言つて一晩中。

父よりも頼もしかったその腕を、私は今でも覚えている。幼馴染のお兄ちゃんは、私の知らない所で大人になっていた。

以来、周りの嘲笑が聞こえた。不用心に女一人で夜道を歩くなんて、襲ってくれと言っているようなものだ、と。拳げ句に

『イタズラされただけで、何を大仰な』

そんな声がどこからともなく。

その時から男が嫌いになった。襲われた事だけじゃない。男を正当化するその声の響きを憎んだのだ。いったい私が何をしたと言いの？ 誘いをかけたとでも？ 露出しながら歩いていたらとでも言いたいのか？ 女つていうだけで、誘蛾灯とだとも言いたいのか？ 女という存在である事自体が駄目なのだと？

痴漢という行為が、体を触るって事だけじゃないって。レイプという恐怖が死に直結した現実だなんて、誰も教えてくれやしなかったのに。

何よりも、男というものは、それら全てを自分の都合のいいように無視して、ねじ曲げる。

「今度俺も相手してくれない。」

知らない男から声をかけられた。

「楽しんだんでしょ？」

なんて。

鬼畜だと。男の本質は鬼畜で、女の本質は脆弱へやうじやくだと。

引きずる私を救ってくれたのは彼の母親だった、そう記憶している。その人は

“オンナ”

の意味を

「大地と一緒に」

と説いてくれた。

「放っておくとただの荒れ地。天候や成り行きに左右されたり、力だけが頼りの害獣に荒らされる事もある。でも大事にしてあげれば大事にしてあげるほど、豊かになって、より大きな恵みをもたらしてくれる。だから自分を愛しなさい。本当の男というものは、大地に種をまき豊穡を望むものだから、その人に出会うまで自分を大切に育てなさい」

それは、人にも依ると後で知る事になるのだけれど。でもその時の私は、私を心から大切にしてくれる

“ 本当の男 ”

に巡り合える日はきつと来るのだと儚くも信じた。

第四話へ続く

第四話 鬼

今年の花見はどうせ独り。正確に言うと今までだって同じようなものだっただと思う。

私は柔らかな土の上にござを広げ、庭の三部咲きの桜を見上げた。それは憎らしいほど枝振りが良く。

今宵、つい先日みぞれの霽がちな空が嘘の様。気味の悪いぐらい冴えた三日月に照らされた雲が瑞兆（ずいちょう：めでたい事が有る前兆）みたいに流れていく。明日には気温が上がるというから、花はもつとほころび見頃に近づく事だろう。

私は桜が嫌い。巷じゃその香りが大流行の様だけど、本当はそんなの、有って無い。多分こんな香りだろうって言うイメージだけが先走り。優しそうだとか、瑞々（みずみず）しいそうだとか、可憐そうだとか。みんな勝手な事ばかり言っている。

桜、桜。花のくせに香りもせず、ましてや実の生らない花なんてまるで紙に書いた

“セックス”

って文字みたいにみたいに無味乾燥で空々しく

“現実”

はそこには無い。だから私は右手をそつと胸元へと差し込み、肌に吸い付くみつしりと重い、水とも脂とも肉ともつかない半球体を掌で実感した。そう、信じられるのは

“実体”

揉めば跳ね返り、つまめば疼く感覚を運んでくれる、これこそが現実だ。

この夜、私は着物を着ていた。若い頃から着慣れているせいかなぜか落ち着く。窮屈だ、そう言う人も多いけど、私はそこが好きなのだ。

私は着付ける時、大切な人への贈り物を包む様に細心の注意を払

いながら装う。一枚一枚を重ね、一糸の乱れも無く定石を踏み、お作法と言う縛りの中に自分を置きながら。そして出来上がった完璧であるはずの姿は、ほんの少しの手心を加えた瞬間、全てが皮を剥ぐ様に綻ぶ一面を持ち。その裏表のある艶かしさが好きだった。

どうせ、独り。誰にも見られやしない。そう思っていた私は、着崩れる事をなかに楽しみ、つけるはずの補正具を使わず、肌に直接襦袢を羽織っていた。だからほら、左手を衣紋（首の後ろ）に差し入れ、開ける（はだける）様にその手を滑らせ乳下に向かって引き降ろすだけで、あれ程整えていたはずの様相がいとも容易く弛んでしまう。正面が割れ、乳を露にする事すら簡単だ。ほら、こんな風に。昔から赤子に乳を含ませるときはこうして来たのだから。

子供を産んでいない私の乳首は、そう、花びらの色だ。磁器の様な乳白色に淡い染め付け。綺麗だと、女の私でさえそう思う。不意に思い立ち、不細工に張り出した若い枝に手をかけた。簡単に手折れると思いい枝を引くと、みしみしと鈍い音で皮が剥がれ、いかにも未練がましく本体から離れるから。私はその女の様な執念深さから素早く目を反らし、私の花びらとそれを比べてみる。

「でしょう？」

私の方が薄くて可愛いピンク色。まるで、処女だ。昔から桜は処女のシンボルだから。私の方が良い、私の方が良い。その時不意に風が吹いた。強風だ。そして私の蕾は見る見るうちに硬く引き締まり、まるで枝についたまま歳を取るぶどうの粒の様に干涸びて。……みっともない。

その刹那、何かが私の手を取った。多分、鬼だ。それは私の手を持ち上げ、ヒュン！ 鋭い音をたて枝を振り下ろした。張り付くような痛みが乳房に走り、頂点にはもっと醜い皺がよる。

「興ざめだわ」

私の唇を借りて誰かが呟く。耳に届いた嘲笑に、思わずもう一度、今度は自分の手で枝を振り下ろした。それからもう一度。ピシッ、ピシッ、と枝がはぜ、心臓の上にミミズ腫れが残る。でも良いの。

それを見とがめる人なんて誰もいやしないから。桜、桜。実を結ばない花。何をやっても虚しくて、握りしめていた枝を放った。惨めだった。

仕方が無い。私は着付けた時からそうであつたかの様に衣紋を深く抜き、前を繕い、何事も無きを装った。

している帯は博多独鈷（仏具文様の博多織）。堅く織られた絹帯は良く締まる。身に添う様に軀に巻き付ける時に響く、シルシルという音も良い。多分ほとんどのオンナが分らない、蛇の這うような絹鳴りの音が私は大好きだ。これを身につける時、私は蛇の鱗を身に纏う。その帯は弛むという事がないから、着物の胸元がいかに乱れようと腰回りは揺らぎもせず、足を開こうにも上手くいかず、時として煩わしい。だから私は股割またわりをする。着上がった後、着物の上から太腿辺りに手を押し割る様にねじ込み、そこから少ししゃがみこむのだ。今晚も庭先に出る前にいつもの様にその動作を繰り返していた。まるで自分の

“女の中央”

に向かつて拳を着き入れるかの様に。

25を過ぎるまで酒はほとんど飲めなかった。そして今は、一升瓶を側に置く。盃は縁が欠けた古い湯呑みに紙やすりをかけ磨いたもので、つまみは天豆。それから一盛りの塩を舐める。花の盛りは目の前。でも、来たと思つたらすぐに散るんだ。女と一緒にだね、そう笑いながら杯を煽る。

どこかの書物で見た事が有る。

『吉野の山に鬼が住む』

『春の宵、狂気の桜に鬼が練り歩く』

と。かの地は遠いけれど、鬼どもはここまで足を伸ばしてくれないだろうか。それならば、一番上等な高杯に盛り込みをし、お待ち申し上げるものを。我を喰らえと言わんばかりに。

なんて寂しい。独りが寂しい。肌も心も全てが冬枯れの中。独酌も慣れた。誰も一緒に飲んでなんかくれやしない。手の中の酒の器

が一番人肌に近いなんて。

鬼でもいから、慰めて……。ああそう、むしろ、人ではない方が
良いのかもしれない。紅い血潮と無縁であっても構わない。鋭い牙
とその爪が、私の皮膚を皮一枚で剥いでくれ、喉の奥から泣き叫ん
だその時にこそやっとな、私は自分が人間だっと思っただ、きつと。

“桜”

なんて、なんて縁起の悪い花。散るを暗喩するその名前。綺麗、か
ね？ 散るその姿を。風に散らされ舞い上がり、やがて路面を汚す
だけの過ぎていく花びらに手を振りながら

『また、来年も』

なんてね。本当にその来年が有るかどうかなんて、誰にも分かりや
しないのに。

いつそ、何事も無きが如、道を踏み外せば良かったんだ。先な
ど考えず、無責任に、自堕落に。無駄に

“叶う”

事を願わずに。

私はまだ半分は残っている酒瓶を持ち上げ酒を注ぐ。ゆらり、水
面の三日月が私を笑うから、素早くそれを飲み干し、過去を飲み込
む。そして再び注いだそこには、変わらぬ風景が映っていた。

風が流れ、雲が行き過ぎる様子を眺めていた。ぼんやりと、自分
の一生つて長い様で短いなって思ってた。その時、生け垣の向こう
に影が揺れた。黒いシルエット、少し大柄な男の姿。

「鬼かしら？」

ふふふ、と思わず笑い声が漏れた。酒に酔ったの幻覚だと思いながら
『やっとな鬼が迎えに来てくれた』

と喜んだ。でもそれは現実で。

「風邪を引かないか」

そう言ったのは見覚えの有る男。疲れた様な生温い風が私たちの間
を横切った。

五話へ続く

第五話 呼び水

目が合った気がした。真つ黒い瞳、それは鬼の赤い目とは違う。

彼がここに来たのは偶然ではなく、来たいと彼が思ったから来たはずで。それなのに今更何を考えているのか、彼はぼんやりとした表情で私を見つめ立ち尽くしていた。その姿はまるでオズの魔法使いに出て来る心の無いブリキの木こりさながら、木偶の坊だった。だから、

「こちらへ」

私から手招きをした。その手の甲が、戻りしなに一升瓶を倒し、

「あつ！」

とつく、とつく、とつく。水よりも濃度の高い純水が大地にこぼれ滲みていく。

「酔っぱらいめ」

彼の声は不必要に現実的。大股が駆け寄り、遅れて慌てる私よりも早くそれは元に戻されてしまい

「飲みたい夜つてのが有るの」

先んじて、言い訳を言っていた。あきれられると思った。昔の夜鷹（一番格下と言われた娼婦）でもあるまいし、ござの上で独り茶碗酒なんて。でも返って来たのは

「分かるよ」

というため息と、私なんか映っていない乾いた瞳。その彼は

「お父さん、大変だったね」

義理堅くもそう言った。

「あなたこそ」

大変だったわね。少し伸び過ぎた前髪が一房、はらりとその額に振りかかり

「一緒に、良いか？」

聞かれて頷いた。独りは、寂しい。そしてきつと彼も、寂しいのだ。

彼は勝手に家の中に入り込むと、ほどなくして戻って来た。そして
『注げ』

とでも言うかのように目の前に湯呑み茶碗を差し出した。掌に乗るのは、見慣れたはずの器。でも父が手にしている時よりも華奢に見える。父が小さくなったのか、それとも彼が大きすぎるのか。酔った頭に幻覚を見せようとしているようだった。

私は座りながら少し上品に一升瓶の口を右手で持ち、脇で抱えながら注ごうとするけど不安定。結局右足の膝を立て、瓶の中央を支える。

ああ、でも気をつけないと。着ている着物は絹だから。洗い張り（注１）は値が張るもの。染みが黴を呼び、絹が腐る。腐った絹は絹じゃない。だから、慎重に。

ゆるゆると立涌の文様（注２）でそれが流れ出し、のつちりしたりリズムが私の太ももに刻まれる。とその時、彼の盗み見る様な視線を足下を感じ、思わずそっと右の足先を前に差し出してしまっていた。腰巻きは紅絹^{もみ}だから、膝を立てる事で現れた扇情的な赤い色が彼の目を捕らえたに違いない、そう思いながら、足袋の隙間から覗く白い足首が月夜に照らされそこにある黒子が彼の心を捕らえてくれます様に、と体が動いていた。

彼の眼に映る私が少しでも魅力的なオンナで有りたい、そう心が欲したのだと気がついた瞬間、ぞわり。何かが私の中で蠢いた。

視線を感じる。物欲しげな雄の視線。産毛がそれを捕らえ、逆立つ。春の宵、空気は何かを孕んでいて、鼻孔を男の体臭が満たした。これは、夢じゃない。彼と目が合い、お互い息を止めた。酒は流れ出し、男のジャケットの袖を濡らす。彼が鬼なのか。私が鬼なのか。「ご免、ね」

伏せ目がちに酒を置き、濡らした彼の手をそっと撫で、拭き取ったはずの酒を舌の先で舐めた。意に反して動きを止めてしまった彼。私は上手に誘えなかったのだろうか？ もしや、大それた事をしただけでお終いなのかもしれない。不安が心を過ったものの、その思

いはすぐに消えた。彼の体が、

“男の反応”

を見せていたから。だから首元をくゆらしながら、着物の合わせがほんの少しずれる様に膝を崩し、私は自分の茶碗を取り上げ誘う様に唇に酒を含んだ。彼は何も言わず杯を干し、緩慢な仕草で

「酔えない」

と言つてはもう一度、盃を重ねた。甘すぎるはずのその味を、彼は苦そうに飲み干す。風の噂で聞いていた。彼が離婚した事。それから再婚の予定が流れた事を。私と同じ。全部流れて何も残っていない。だからこれは、傷を舐め合い、慰め合う、そんな行為なのかもしれないけれど。

「ねえ」

私は

“考える”

という事を未来へ先送りし、しなだれかかる様な仕草で彼の首に両の手を巻き付けた。持ち上げた腕の所為でお袖が肘の下へと滑りゆき、

『お着物を着ていて腕を見せるんで、なんてはしたない！』

そう叱責する義母の声が聞こえるようだった。でもね、とつてもうつとりとした気分になるの。絹が肌の上を滑り、見せてはいけない所を見せるって、ね。それからね、してはいけないうって言われた事をするのは、とつても魅力的じゃない？

私は自然に浮かび上がる笑いを止める事無く腕に力を込め、顔を引き寄せ、男の少し厚めの唇を上唇と下唇で挟んだ。柔らかな内側が擦れ合い、私は蛭の様に吸い付く。彼は嫌とも好いと反応しないけど、私は楽しんでる。夫、いや、夫だった男の肌以外私は知らないから、人というものが同じ唇でありながらこんなにも違うものかと戸惑い、それがこの年になって初めて分かった事に奇妙な高揚感を覚えた。まるで進化を楽しむ原始生物になった気分だ。

彼は目を開けながら私の瞳を覗いている。だから私は瞼を閉じる。

見たくなんか無い、ただ、溺れたい。齒の隙間からほんの少し舌先を差し出し、上唇のふくらみを舐めた。少し荒れ気味の唇は私の唾液でぬるりと潤い

「なぜ、笑う」

彼が問う。

「嬉しいからよ」

自分がオンナだって分かるの。感じるの。腹の底が充血してね、男を迎える準備をしている、それが分かるから嬉しいの。あれほどつまらないと毛嫌いしていたその行為を、喜んで迎え入れようとしている今の自分が嬉しいの。この年になってやっと、私の中でオナナの本能が目覚め始めた、そう思えるの。今の私は、生きている。

酒臭い甘ったるい息が二人の間で渦巻いていた。でもきつとそれは私が吐き出している欲望の香り。生暖かいくせに芯には寒い春の風が行き過ぎる。救われる為には今一度、熱を。このままで本当の春が来る前に、私は凍え死んでしまふ。だからそつと立ち上がり、丁度昨日掃除を済ましたばかりの

「納屋に」

そう誘い手を引いた。彼はその手をするりと放したが、それはささやかな足掻きだと私には分かっていった。だから私は先に行く。彼を置き去りに。

懐には一升瓶。こんな寒い夜を乗り切る為に、春を呼び込む嵐を起こす為。私は本当のオンナになってみたかった。

第六話に続く

注 1 洗い張り

着物特有の洗濯方法。仕立てている糸を全て解いてから洗い、もう一度縫い直す。

注 2 立涌文様

波の様な線が縦方向で規則正しく並んでいる、日本古来の文様の一種。

参考サイト [http://www.ikiya.jp/cres
t/warrituke/tatewaku.html](http://www.ikiya.jp/cres
t/warrituke/tatewaku.html)

第六話 狂い咲き

私は狂っている。それぐらい、知ってる。それよりもこのまま、このまま狂わせて欲しい。ふとした瞬間にまた現実に戻ってしまう、そんな自分が苦しい。

『父さんも心配しないで。それより早く良くなって退院してよ。大丈夫、こうして私が戻って来たんだから、家の心配はしないで』

『佐伯の伯母さま。お気落ちなさらないでくださいね。私もこうして近くに住んでおります。何かございましたら、飛んで参ります』

『ええ、そうなんです。ご縁が無くて昨年実家に戻って参りました。もしどなたか良い方がいらっしゃったらご紹介ください。いえ、ほんの冗談ですよ』

気丈さんなんて、嫌い。分別も、結局生きていくのに邪魔なだけ。きっと私は狂っているほうがいいのだ。

そして今の私は、狂っている。

不妊外来なんか大嫌いだった。内診台も、中途半端にしきるカーテンも、足下の隙間から見えるナースシューズも、冷たいクスコー（内診器具）もエコーも。あの匂い、清涼感を売り物にする合成化合物。薄っぺらいピンクの壁紙がアメリカのファストフードみたいなコメディを思い出させてくれ。その日

『確か今日は排卵期でしたよね』

義母からふられる朝一番の会話。羞恥心を忘れてしまっていた私達。『ええ、そうなんです』

微笑みを絶やさず答え、ああ、今日も抱かれなくてはいけないのかって思った。彼は出がけに義母から念を押される。

『今日は早く帰って来る日ですからね。桜子さんを待たせてはいけませんよ』

知っている。待たされていると思っっているのは、あなただ。

夫の夜はまるでブリキのおもちやのよう。時間はのろのろと過ぎた。

だからといって人工授精の方がまだましだったとも思えない。そこまでしてあの人の子を産みたいと思わなかったから。義母がその話を持ち出した時夫が示した猛反発に、私は嫁いだから初めて彼を男らしいと思い、たったそれだけの事なのに畏怖させ覚えたものだった。

いつしか、子を宿す、その事を恐ろしいと思う様になっていた。肌の匂いが嫌いだった。彼の匂いが、男の匂いが大嫌いだった。赤ちゃんと言う未知の生物は、私の中で形を変え、日増しにエイリアンの様な存在にすり替わって行った。

でも、今の私は違うのだ。どうせ孕まないと知りつつも、この男の子ならばと本能が告げている。彼は他の誰とも違う。今この場で私をオンナにしてくれる。そして彼も同じだという事を、肌で感じていた。

今の私は

“人間”

以前に

“動物”

だった。

この時初めて結びついた。生きる事は、狂気だ。抗えられない強い力に攫われ、本能の声を聞き。ヒトの道を忘れる。

観音開きの扉を薄く開け、振り向き様、磨かれた板の間に彼を引き込んだ。力なんて要らない。彼のシャツの裾を少し引き出し、掴んで揺らすだけ。

「こっちよ」

全てがひんやりとしていた。

先に腰を下ろし彼を迎える。でもその前に

「ここは寒いわ」

もう一度一升瓶を持ち上げた。うつすらと端の欠けた茶碗に清酒を注ぎ終わった次の瞬間、

「あつ……」

酒瓶は男の手に渡り、まるで徳利でも扱つかの様に軽々と口を付けられていた。喉が鳴り、彼の眼差しの先には私がいる。

とつとつと動くのど仏をうつとりと見ていた。彼が飲み終わり、左手の甲でぐいつ、口元を拭う、それが合図。私は自分の手の中のそれを一息で飲み干した。

熱が私を支配する。これは生まれて初めて感じる

“熱”
だ。

「来て」

私は歓喜を八掛け（裾の裏布）の隙間から覗かせた。高窓から真っ直ぐ差し込む月の光が二人を照らす。

着物の着付けはお紐が多い。そのぶん複雑で、着崩す事は簡単でも知らない人には上手に脱がせる事は難しい。そこが、良い。私は若いを取り柄の小娘じゃない。こんな時でも全裸になって年増の崩れかけた体のラインを曝すのは嫌だった。そして何よりも、軀に食い込む腰紐がもたらす緊張感が、まるで命綱の様に最後の理性を留め置いてくれる、そう感じていた。

私は本当の自分を隠しながら、みつしりとした彼を受け入れた。高い天井のぼつかりと開けた空間が私たちを見下ろし、手の届きそうな月の影が笑っていた。

明け方、納屋の隅に捨て置かれた古い茶箱から引きずり出した布団に温々と包まりながら目を覚ました。一番最初に感じたのは、暖かさ。顔に当たる冷えた空気とは対照的な、湿りを帯びた潮風の様な空気。さらさらと硬い無精髭が私のおでこを擦り、胸を覆っている腕を重くて辛いと思った。でもそれはもう少し味わってみたいと

思える痛みだった。

子供の頃の私にとって、彼はとても大きなお兄ちゃんだった。その距離はなまじ年が近い分、大人よりも大きく感じたもので。それが今、こうして男と女の関係を結んだなんて、小学生の頃の私には思いもつかない事だったろう。

目を覚ましたのち、男は避妊を忘れていた事に慌てた。

「申し訳ない」

彼はきつと

『酔っていたから』

そう言い訳しそうになりながら、何度も押しとどめたに違いない。むしろ私にはそれで良かったというのに。だから笑い飛ばしてやった。

「どうして？ 子供が出来たら、私はあなたと結婚してあげないといけないの？」

女性が妊娠したら、男性は責任を

“取ってあげて”

結婚をする。当然と言えば当然なのだろう。でもね、でもそんなの、傲慢だわ。私は、私。私は抱かれたのではなく、抱いたのだから。

彼は不思議そうに肩を落とし、着こなれたジャケットを羽織った。私の肌には初七日の抹香の香が残っていた。

第七話へ続く

第七話 白昼夢

私の実家は無駄に広かった。しかも廊下は板張りで、掃除機だけじゃ綺麗にならない。だから硬く絞った雑巾で磨く様に拭いてゆく。面倒臭くないと言えば嘘になる。その上何年かぶりに味わう鈍い痛みは、しゃがみ込む度に私の体を軋ませた。でも古い家というものには磨けば磨く程味が出て愛着が沸くものだから、結局は頑張つてしまひ。最後に残った仏間の掃除が終わった頃には、心地よい疲労感と共に軽く汗ばんでいた。その香りは昨夜の情交を私に思い出させてくれ……。息を吸い込む。僅かに残る彼の肌の香りとサンダルウツド（白檀）。それに咽せた。

これは、いけない。捕らえられてしまいそうな想いに引きずられながら、何とか体を動かし洗い物をすませるものの、流しの横に鎮座している彼の使った湯呑み茶碗についつい目が行ってしまい。添えられた太い指と、含む様に嚙る口元が蘇る。

激しかった。獲物に襲いかかるライオンしながら指先が両の襟にかかり、わらわらと開け^{はた}られる胸。噛み付く様な愛撫に導かれ、あげた悲鳴は彼の喉の中へと墮ち込んでいく。

あの映像を思い出し、どうしようも無い欲情に囚われてしまった私は、まだ日が高いというの

「一回だけ、ね」

誰もいない独りの家だと分かっていながら、周りの気配を気にしつつ、こっそりと自室の布団の中へと潜り込んだ。一人で

“する”

事にやるせない気持ちも有ったが、今更抵抗は無い。今までだってずっと自分で自分の体を満足させて来た。しかし昔と今では想いが違う。今日の私は、満たされない要求を自分の指で晴らすというよりも、彼に呼び覚まされたオナナの本能を鎮めたいという、贅沢な望みが有った。

昨夜、彼の手は私の足首に触れた後、下から上へと這い上がり、器用に着物の股を割った、ぱっかりと。紅い下履きの中、二本の足は僅かに震えていて。指。指が這う。女の軀のしなやかさを知るその腕が、強い力で私の肉に食い込み、求め。

「桜子」

私の名を呼ぶその唇が、花びらの先端を転がし舐めたかと思うと、内側の柔らかさではさみ込み、引き千切る。悲鳴を噛みしめた。激痛だった。未知の世界が恐怖だなんて、初めて身を以て知った。でももう、引き返せない。

充血、していた。全ての血液が体の底に集まり、神経という神経が一点に。拳を作り唇に当て、うめきを堪える私。でもふと気づく、違うのだと。私が欲しているのは

“耐える”

事じゃ無い。

“狂気を、解き放つ”

だから彼の頭をつかんだ。もっと、奥！！奥へ、奥へ！！欲しい、欲しい、欲しい。でも、欲しいものは弱くか細い葦^{あし}なんかじゃない。杭が欲しい。私を打ち付け、現世に軀も心も留め置いてくれる、そんな食い込むような熱情が。

重圧。体を押しつぶす様な重圧を。これは夢なんかじゃないから、もっと、ずっしりと。息もできず、むしろ、止め。ジェットコースターに乗っているかの如、吹き飛ばされそうな風圧に縛り付けられ、逆らう事の死を予感しながら、吹き飛ばす瞬間を待つ。柔らかな私の全身に力が入り、私は彼を締め上げ、縋り付き、叫ぶ。

『生きたい！！』

感じた瞬間、目の前に光が走った。体は絶叫し、壊れてしまうとうねりねじ曲がり、彼から逃げ出そうとした。すると唸り声の厚い手が私の骨盤にかかり、

“逃げるな”

と強く命じ。痺れ、反り返りながら空気を求め喘ぐ私に被い被さり、

見せしめの様に責め立てる。

だから弾けそんな意識の下で自分に言い聞かせた。

『もつと貪欲な、いつそ鬼になれ』

と。オンナを楽しみ、快樂を我が身に染み込ませ、生きる事を貪れ、と。

未開発の私。今まで

“オトコ”

では一度もイッた事が無く。どうやれば濡れるのか、乾いた心じゃ分からなかった。でも私は瞬時に別の生き物に産まれ代わったのだ、そう、オンナに。水を得て、潤い、私は進化したのだ。だから、逃げながらも喰らい付く。

軀で覚える。感じるという事を。これはきつと、産むという事にも似た恍惚感。痛く、苦しいともかくその先にある、天国。多分、死ぬという事もこういう事なのだ。

その瞬間の彼の瞳は、まぎれも無く私を見つめていて。私達は全く別の人間でありながら、確かに、一つになっていた。だから瞼の裏に彼の姿を映し

「真ちゃん！」

その名前を叫んだ。私は体に残っていた昨夜の情炎を迸らせ、爆発し——果てた。じんじんと痺れ、もう動く気力は無かった。昨夜の寝不足の睡魔がここに来て私を襲い、暖かな日差しが子守唄を歌う。それから後は、独り緩やかな罪悪感に包まれながら、鬱々と夢の中へと彷徨い落ちて行った。

第八話 対価

その日、夫の隣でうつむきながら口の端を持ち上げた彼女。まだぺしゃんこなお腹にそつと守るかの如く添えられた両の手。可愛い、新婚の奥さんの様なシルエット。でも、分かつちやいないわね。

「くすつ」

堪え切れずに漏らした声に、潜む柳眉が

「桜子さん！」

たしなめた。

「あら、ご免なさいね。でも良いじゃないですか、最後ですし。笑つてお別れさせてくださいな。それに私、今日を限りにこの家とは縁が切れるんですから、もうあなた様の嫁ではございませんのよ」

だから、

“こちらの方を可愛がって頂戴”
と。

何しろ夫だった人は知らない人はいないと言う一流大学出のお坊ちゃんだから。一族郎党その大学で、子供が産まれたらすぐに幼児舎に入れられる様に手はずが整えられている事を、私は嫁いだときから聞かされて続けて来た。

『亡くなった私の夫は、現塾長の勢家さんの同窓だった事ですし。

ご遠慮申し上げても、色々とご便宜頂く事になるでしょうから、今から大変だわ』

お母様はほんの風邪でもその大学系列の病院じゃなければ受診できないと駄々をこねるほどのプライドを持っていらつしやる。

『だってそうしないと、先生の面子を潰す事になるでしょう？』
と。

だから、ね、出来損ないなんかじゃ駄目なのよ。完璧じゃなきゃ、産まれて来る命が、

『五体満足であれば、もう何も要らない』

なんて、この家に限ってないから。だから目を凝らして良くごらん
なさい、あなたの周りを。鉄の格子が見えるでしょう？ そう、あ
なたは私の代わりに牢獄に入ってくれるの。

私が差し出した彼から受け取った宝石の数々を、子供の様に上目
使いに見つめる彼女。健康そうなるまるまるとしたほっぺは、不倫だ
とか略奪愛とはまるで縁が無い様で。ただ、無邪気。

でもね、彼女は一生、姦通の緋色を背負うの。ほら、目の前にあ
るルビーみたいな色をね。

映画の

“ スカーレットレター ”

みたいで素敵。まるで

“ 本物のロマンス ”
ね。

義母はテーブルに差し出されたそれを満足げに見ていた。まるで、
こうだ。

『これは我が家の嫁の財産。こんなに素晴らしい宝石を受け継ぐ事
が出来ると新しい嫁は、なんて幸せなんでしょう』

勿論、前の持ち主は義母。彼女は嫁を持ち上げながら、実は自分を
讃えてる。だからこそ、そんなもの、要らない。

「これで全部でしたかしら？」

問う私、頷く夫。でもね、一番肝心なものを忘れてるわよ、あな
た。

「これも、でしたわね」

薬指から外したそれを、私の指より一回り太い彼女の掌に握らせた。
啞然とした表情を浮かべた彼女に

『アリガトネ』

感謝するわ。

メールでしか会話を交わさなくなった友人がたしなめる。

“ 慰謝料、沢山貰わないと！ 裏切られたんだから！”
でもね、いいの。

「婚姻生活が破綻した後の性関係は、不貞じゃ有りませんから。不法行為にならないって、野々村弁護士先生がお怒りでしたわ。慰謝料なんか必要ないって」

ごもつとも。手を叩いて拍手してやりたかったわ。お母様、万歳。天晴よ。私達の関係は最初から

“裏切る”

なんて言えるほどの繋がっていなかったって事よね。

ねえ、あなたは私が受けた仕打ちを垣間見てどう思う？ 私は目の前の少女に向かって心の奥で問いかける。

『あなたが勝ち取った地位がいつまでも安泰だと思う？』

名家の嫁と言われ一族揃って諸手を上げて迎えられ、結局子供を孕まなければ用済みとばかり、下げられる。

きつとあなたには自分の十年後なんて怖くなんか無いんでしょうね。ええ、そうよ。私もそうだったからよく分るわ。こんな日が来るなんて、露程も思った事は無かったから。

そんな私をみんなは

『可哀相』

と言う。でもね、感謝しているから。あなたに。だから全てを受け取って。返品なんて、嫌ですからね。

200万という数字を貰い、家を出た。それが私の

“10年間”

だった。もう、十分だ。

それ以来、実家に戻って生活をしていた。保健、年金、税金、食費に光熱費。普通の暮らしには意外とお金がかかる。全てを父にまかせる訳にはいかず、私も働かなければいけないのは当然の事だった。お茶やお花の免状は持って入るものの、今のご時世、それで飯が食えるほど甘くない。ましてや私は一度も働いた事のない、社会を知らない女だった。

それでも拾う神様はいる。着物を着る事を条件に、知り合いのつ

てで見つけた料亭の仲居のパートは時給がすばらしく良く、正社員とまではいかなくても、女一人が細々とは有るが食って行ける収入を得る事が出来た。そしてこの日は週末。一年近くを過ごし慣れたとは言うものの、金曜の夜は目が回るほど忙しく、体は崩れそうになりながら、張り付いた笑顔を通し仕事を終えた。なにしろ、お金を稼ぐってこういう事だって、産まれて初めて実感していたから私の夫だった男も、きつとこんな思いを隠しながら私達を食わせてくれていたのだと、今更だけど気がついて。

「悪い事、していたのかも」

私と彼との関係にばかり気をとられ、労る事の無かったあの頃の暮らしを反省したりもした。その気持ちを引きずりながら、料亭を後にする客に向かって頭を下げた。そして馴染みの客が帰りしな、靴べらを手にしながら振り返り、

「ああ、そうだ」

私の手に折り畳んだ紙幣を握らせて。描かれていた樋口一葉が

『自立せよ』

と言いながら私にしかめっ面を見せた。

「ありがとうございます。こんなに沢山」

それでも私は嬉しさを隠す事無く礼を言った。

頂いたチップに機嫌を良くし、帰り道、閉店間際のスーパーで叩き売りの平目のお造りを買った。それはお義母様が大嫌いだったお魚。

「こんなに美味しいのにね」

私はほくそ笑み、家までの数百メートルの道のりを歩く。誰の顔色を見るでも無く、好きなものを選ぶその喜びを味わいながら。

何とはなしに嬉しい気分です。門を越え、玄関に抜ける途中、

「誰！」

庭先で揺らいだ影が有った。さすがにこの夜は素面。いいかげん歳がいつているとしても23時の闇に息づく気配は怖く、ポケットの中に隠していた手に力がこもり、叫ぶ為の心の準備をした。

「遅かったな」

不意に現れた少し赤いその顔は、日本酒の匂いを漂わせながらふてくされた様にそう言くと、私の手から荷物を取り上げた。

「……何しに來たの？」

男は問いに答えてくれず。背を向け、庭に入り込んだかと思うと、見覚えのない酒の瓶を持って私の目の前に戻り、それを玄関に向けて軽く振った。どうやら一人で瓶ごと酒を飲んでいたらしい。早く家の鍵を開ける、と言わんばかりの態度。そのくせ彼がすると傲慢だと思わないから不思議だった。

「気をつける、こんな時間まで出歩いていて。何考えてるんだ。そこまでして働く必要が有るのか？」

彼はまるで保護者でもあるかのように苦い声で叱った。

「そりゃもう」

10年以上前のことを言っている、そう思った。口調とは裏腹に彼は心配してくれているのだ。

「ありがとう」

思わず微笑んだ。

「でも、大丈夫。もう子供じゃないから。防犯ベルは2つ持ってるし、携帯にもGPS 付けて」

ポケットの中から開いた携帯を取り出し彼に見せ

「電話帳、一番最初は警察の番号。2回のプッシュでつながる設定よ」

私は肩をすくめた。

「いつでも覚悟しているの」

“女である事の負の財産”

は、今に始まった事じゃ無い。

目の前にちらつかせた画面を初期画面に戻し、気がついたらほっとため息をついていた。無事に家に帰って来た。多分もう安心して良いのだから。鍵を取り出し玄関を開けた私に

「苦労したな」

察しの良い彼が呟いた。

「そんなでもないよ」

私はアレ以来男に気を許せない。だから夫にも気を許せなかった。でも結局それは良い結果になった訳で。情が移り、捨てないでくれと泣き叫ぶ事だけは免れた。今じゃ面影も思い浮かばないほど。だから、全てが悪い訳じゃない。

物事には対価が有る。失っても得る事が。それよりも……。

“今”

を私は感じている。

彼が再び私に会いに来た。この目の前にある現実。背中越しに感じる春を呼び込む強い力。あの夜以来花冷えが続き、桜の蕾は停滞していた。それが、今晚ほころぶ兆しを予感した。そう、私の中で。

第九話へ 続く

第九話 欲望の鳴き声（前書き）

残酷な描写が有ります。苦手な方は絶対に回避願います。

第九話 欲望の鳴き声

ちゃぶ台を間に、彼のすぐ斜め隣に座る私。結局二人で酒を飲む。彼は一言も発せず、私も何も言わない。結局、男と女はこういうものかもしれない。会話じゃないと。何しろ彼の目は私の軀の上を泳ぎ、時々落ちては再び、舐める様に這い上がる。

私を啜るかの様に彼の唇が茶碗の水面をかき乱す。それに応えるが如く、つばめた口でこくこくこくと清酒を流し込み、夜に備えた空きっ腹に染むのを覚悟して。

「何か欲しいものは有るかい？」

不意にそう問われ

「種子」

私はとつさにそう言った。呆れた様な顔を見せる男の、あぐらをかいたその膝に乗る様にちよこんと座り、

「子種」

それが欲しいと。彼の耳元に被さる心持ち巻いた黒髪に指絡ませながら、息を吹く。

子種の無い男なんて、男じゃない。石女が女じゃ無い様にね。だから

「種子が欲しい」

と繰り返し、ついつと彼の顔が見える所まで体を引いた。

さあ、心見せてよ。くれるんでしょう、欲しいものを。だからあなたの覚悟を見せて。見返す彼の目は濁っていて。それでいて明確な意図を持ち、動いた。

桜が舞う、鬼が舞う。庭の桜の木の枝が柳の様にしなり、蛙が死にもものぐるいの跳躍を見せるがごとく、鬼が踊る。

その夜、私の部屋に彼を誘った。六畳一間。二階の奥部屋。降り出した雨に、窓からは朧月。ぼんやりとした影が揺れる。

どうせ今晩も飲むのだからと、布団は延べてあり。そこに二人で

転がる様になだれ込んだ。

「あはははは」

笑う私。でも彼はにこりともせず、私の顔を両手ではさみじつと見つめた。

「狂ってるから」

何か言われる前にそう言った。この収集のつかない気持ちを分析なんてして欲しくない。

「要らない、の？」

彼の手の中をすり抜け、引き返し、両手を彼の首にまわす。滑らせる様に、誘う様に。嫌とは言わせない様に。彼は、欲しがっている。私の本能が教えていた。彼は私のオンナが欲しいのだ。彼の雄が蠢く匂いを肌で感じ

「来てよ」

夜が始まる。

今晚の彼はいやらしく、前回にも増して楽しんでいた。その上「今、子供ができたら俺の親父の生まれ代わりか？」

事が終わり、仰向けになりながら手を額に当てながら彼はそう言った。

「なんだか、シャレにならんなあ」

その言葉はむしろできて欲しい、そう言っているみたいで怖かった。

「馬鹿な事言わないで」

背を向けた私の軀に、太い腕が巻き付いて

「何そんなに真剣になってるんだよ。冗談じゃないか」

のどの奥で笑う声が聞こえた。

嫁いだから3年ぐらいしてからか。ふと心に沸き上がる絵が有った。

『安達が原の鬼婆』

子供の頃に忍び込んだ煤け（すすけ）た土蔵の奥底に。茶箱の隅に隠された怪奇絵本の見開きの世界に彼女は住んでいた。

縄で結わえられ、逆さまに吊るされた産み月の妊婦。くくりつけられた梁がその重さで軋み、囲炉裏端の炎が長く豊かな髪を焼き尽くす。

『タ・ス・ケ・テ』

柔らかな体を持つ女の瞳が泣く。そしてその目と差し向かう凝視、鬼婆。干涸びた乳房のオンナ、それが彼女。包丁を研ぎながら見上げるミイラの様な肉体は、不意に視線を

“こちらの世界”

に向けたかと思うと、はげかけた表装の縁を乗り越えて、今という時代にやって来た。オドロオドロした色彩が土蔵の空気に墨流しの様にとけ込んで私を圧迫し、彼女の背負う異形の世界に恐怖を感じた。

と同時に、見てはいけない物を見てしまったその背徳感に、密やかな興奮を覚えた事も確か。

湿った紙の匂い。高窓の鉄格子の隙間を縫う木漏れ日。そこからは陽炎が揺らめき立ち。妊婦が回る。口輪をすげられ、半裸の素肌に縄かけられて、その足首は高く梁に。くるっ、くるっ、くるっ。

その横に座る老婆が包丁を研ぐ。シャイツ、シャイツ、シャイツ。

『ぼちぼち、食べごろか』

守銭奴が市場で品定めをする目つきで見上げながら。

あの頃、一人で空を見上げながら思ったものだ。鬼女が欲したのは、きつと胎児だったのだと。臨月の腹は重い。腹に荒縄が食い込むから、児はくくられ下へと下がり。妊婦は恐怖のあまり現状が分からず、ただ目を細め、がむしゃらに許しを請う。助かりやしないのに。

砥石が鳴く。

『童はまだ大きくなれる、ちとまだ早い。でも、今宵割くしかなかるうて。この女は産み刻に入ってしまったからに。このままではじき産まれてしまう』

本当に食したいのは胎盤だ。鮮血がみなぎり、生の鼓動を伝え。そ

れを母体から根を抜く様に引き剥がす。???何よりもそこには女の“性”があるのだから。

彼女に

“本当の子供”

はいない。多分私と同じ、石女。なによりも、鬼ではなかった、最初からは。彼女にも人としての少女の時代が有ったのだ。初々しく、ささやかな日常に笑い転げ、悪しを知らず。

やがて月日が経ち、良人おとこも家族も亡くした

“成れの果て”

は、女の根底を喰うようになる。母と子をつなぐその絆を。生きるという事を他人から奪い取り、我身とし、再び女として君臨する日を夢見る。

妊婦の露出した腹。その一番皮膚の薄い所が張っている。まるで騙されやすい老女が神仏にお金でも差し出すかの様に。そこを一直線。力なんかいらさない。引き、さえすれば良い。

生暖かくぬめる血。私が、いや、ほとんどの女が月に一度は嗅ぐ事になるあの匂い。金属を含んだねっとりとした甘い香りを。それを手に受け、指に散らし、ゆつくりと滴り落ちる様を見て。

「生を!!!」

そう叫ぶ。

私の心に住む鬼が踊る。かかと踵を大地に打ち付けて。彼女は何を喰らいたいのか？ ホルモン剤を飲めば解決するのか？ それともすでに子のいる男の元へと嫁ぎ行く？ その男から子を奪い、親の地位をすすめ取る？ 略奪こそが快樂のループ？

『違う!』

それは形にならず、ヘドロの様に異臭を放ち、ぶわぶわと揺らぎながら宙に舞う。私の欲望は別の所にある。……知ってる。でもその正体は分らずにいた。それでも、少しずつ、確実に……。

寢息を立てる男の軀に寄り添った。まわされていた腕にごく自然に力が加わり、私は彼の胸の中に引き込まれ

「ふうっ」

ため息の様な吐息を吐いていた。

知っているのは、薄い胸板と丸く切りそろえられた爪、別々の夜具。でも、彼は違う。男だ。

“自制心と激情”

優しい口付け、こめかみから額に。頭を撫でられ、髪をすかれ。眼を見開こうとする私のまぶたにも。彼はその最中何も言わない。でも、見つめている。太くてごつごつした指が首の後ろを捉え、唇を被い尽くすキスを繰り返す。もう片方の手が女をまさぐり、ぬめりを泳ぐ。瞬間、身じろぎもできないほど強く押さえつけられ。喘ぎながら私は男を感じ。汗ばむ素肌から、欲を吸い取る。濡れた軀が重なる。突き上げる原始的な要求。

『もっと！！』

何も考える事なんか無い、そう思い知らされる。私はオンナで在りさえすれば良い。

そのまどろみの中、答えが降りて来そうだった。まるで桜が散るかの様に、扇を高めから落としたかの様に、ふわり、ふわり。右に左に。そして私に降り積もるその寸前、雪の様に溶けて消え、私はその正体をつかめずにいた。

第十話へ 続く

第九話 欲望の鳴き声（後書き）

『安達が原の鬼婆』について

諸説色々有ります。ここにおいては、彼女が昔見た絵をもとに空想しているシーンとなります。

また、その絵はこちら（コピーペースとしてリンクしてください）
<http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/6/6d/YoshitoshiAdachi.jpg>

になります。『安達が原の鬼婆』の絵としては非常にポピュラーかと思えます。

残忍な絵になりますので、ご覧になるときはご注意ください。

第十話 母と子と

寝起きの彼は

「腹が減った」

と笑った。自分の服を着るではなく、押し入れの奥から引き出した丹前を直接素肌にしに纏い。

「飯が食いたい」

と。

「この季節なら、鯛が良い」

悪びれた風も無い姿に、思わず笑いながらも従っていた。多分、相性がいい。夫だった男には悪いけど、やはり彼とでは駄目だったんだ。結局茶漬けを啜りながら、梅干しを齧り、会話をするでもなく二人で過ごした。

連絡が有ったのはその週末あけの早朝。桜は一気にほころび、昨日までさりげなく身の回りに侍^はっていた男は今晚も来ると言い残し去っていった。だから、

「もしもし」

受話器ごしに聞くその声を忘れかけていた。

「助けて欲しい。君だけが頼りなんだ」

一瞬、

『どなた？』

と言いつうになった。

門の外で私を迎えたその男は

「済まない。でも、来てくれてありがとう」

と頭を深く下げ降ろし、私を丁寧に招き入れた。それは私が初めて見る姿。

「母が夜中に急に倒れて、本当にどうして良いか分からなくて。今病状は安定しているけど、でも、こういう時に何をすれば良いのか、妻も僕も皆目見当がつかなくて」

赤く腫れた目が小さく肩をすくめ、家の奥からは赤児の泣き声が近づいてきた。

男の子は可愛らしくむずがり、それから抱いている女は恨めしそうに私を見つめた。それでも

「ありがとうございます。わざわざ来てくださって」

そう囁いた。夫も変わり、そして彼女も変わっていて……動揺した。しかし

「いいのよ。どうせ今日は仕事がお休みだったから」
平静を装った。

朝の電話で聞いていた。赤ちゃんには障害があった、と。私と別れた直後、羊水検査の結果が届き。義母は荒れたようだ。電話越しの彼の口調から察した。

「そうなの。大変だったわね」

それ以上、私はなんて切り返せば良かったのだろう。

私しか頼れない、そう懇願する彼が哀れで、罵る言葉は頭に浮かびもしなかった。かといって同情するでもなく。一度は縁があった家だから。助けてやるのは義理だと思った。何となく、

“本物の鬼にはなりたくない”

今の私はそう思ったのだ。

彼女の実家は遠く、助けにはならないという。私の元の夫は、こんな日だというのに会社に行かなければいけないらず

「プロジェクトリーダーなんだよ。済まない」

再びに頭を下げた。彼が家を出るタイミングで赤ちゃんが吐き戻してしまい、私達は玄関に二人きり。

「行つてらっしゃい。お氣をつけて」

それは忘れてしまいたいと思っていた習慣。彼は

「ああ、行つて来るよ」

昔と変わらない言葉を返し、二人同時にハッと気がついた。それは有り得ないのだと。

「母はあの様に気難しい人だから。君が苦勞しているのに守ってあ

げられなかった僕が悪かったと、今なら思っんだ」

彼は振り向き、唐突にそう言った。

「あの頃の僕には、家族を守る覚悟が無かった。でもこうして、苦境に立たされたやつと分かった気がする」

その苦境の意味が、赤ちゃんのどこだと言っ事はすぐに察しがついた。

「君を裏切って捨てて、それなのに困ったときだけ頼るだなんて、調子のいい男だと思うだろう？ でも、これしか思いつかなかった。どんなになじられても、家族を守らないといけないんだって。母や加代子が困らない様にしてやるのが男の責任だって、それで……」言葉に詰まった彼は、必死で私の目を見つめ返し、唇を噛んだ。？？もう、分かったわ。

「良いのよ」

家の事は何もできなかった彼。きつと親類縁者の連絡先も義母が管理していて、知らない。そう、何もかも分からないに違いない。きつと新しい奥さんも、子供に手一杯で他の事なんかできなかったはずだから。

緊急入院した義母の下着や日常品をまとめるため、彼女と二人、家に残った。そこでようやと

「大変だったわね」

と声をかけられた。彼女は一瞬無視するかのように顎を引き締め、うつむいた。

仕方が無かった。常識で考えれば、彼女が私を追い出したのだから。いたたまれないのは当たり前。それなのに、一番大変な時に私がこうして上がり込み、辛かろう。

「そんなでもないです」

それは背中越しの返事だった。

勝手知ったる何とやら。私は
「邪魔するわね」

と台所に入り込み、シンクの下を開けた。そこには一年前と変わら

ず古びた瓶が有り。義母が大事にしていた糠床をかき混ぜ胡瓜を取り出した。少し酸味を増しているその香り。

「この糠床、一日一回かき混ぜないと、痛んで嫌な匂いを出し始めるわよ」

だから気をつけて。

「重いだろうから外に出しておくわ。あの人にはあなたから言つてね」

小さく頷く彼女の気配を感じながら、光沢を放つ胡瓜を切る。お米は多分炊いていないだろう思つて、来る途中のコンビニでパック入りのご飯を買つて来ていた。それをチンして、うさぎ模様の見慣れない茶碗によそつた。

「食べないと。あなたが倒れたら、誰も赤ちゃんの面倒を看れる人、いないんでしょう？」

初めて見たときのふつくらした彼女の面影は無く

「頂きます」

そう言つて箸を持った彼女の指は私よりも細かつた。

産後の肥立ちが悪く、しばらく床に臥せていたという。その世話で無理がたたり、あの義母が倒れたと。それは私には想像できない姿だった。私は彼女が食べている間、義母の部屋に行き荷物をまとめる。あの人が好きだったシャネルの香水の香りが立ちこめ、入院しているというのが嘘の様。すぐ後ろで障子が開き

『あら、桜子さん。私の部屋で何していらっしゃるの？』

そう声をかけられそうな気がした。

面会に行った彼女は思いのほか元気そうだった。

「あのこの事だけど」

低いけれども思いのほかはつきりと響く声がまず自分の言いたい事を言う。

『来てくれてありがとう』

『迷惑かけたわね』

なんて社交辞令は無い。私が来る事は多分息子から聞いていたらしく驚きもせず、神経質そうな、狐の様な顔も変わらない。でも私はそれを遮った。私はもうあなたの言う事をおとなしく聞くだけの

“嫁”

じゃない。

「お礼は要りませんよ。それに大丈夫ですから」

“あのこ”

が誰だろうと今の私は構わない。目の前で一瞬のたじろぎを見せる老女を私は振り切る。

「ここに来る前、親戚の皆さんやお稽古関係の人達で連絡を差し上げた方がよい人達を新しいお嫁さんに教えておきましたから。それにヘルパーさんが家に来てもらえる様に手配もしておきました。有料ですけど、買い物と掃除、洗濯、毎日来てもらえます。これであなただけのお嫁さんも息子さんも困りませんよ」

「ええ、そうでしょうとも。桜子さんだったらそういうお手配は簡単にできると思っていましたよ」

そう言いながら殺した様なため息をつき、

「着替えはベッドの下の引き出しに入れて頂戴。それから洗面道具は床頭台の引き出しにね」

彼女は口を閉じた。そして黙々と片付ける私をじっと見つめていた。

「大体こんな所ですので。私は帰ります」

長居をする場所じゃない。私はさっさとしまい終わると、持って来たハンドバックを手に取った。すると彼女は荷物を入れて来た紙袋を指差しこう言った。

「これは家に持って帰って頂戴」

彼女の言う家は、実家の事だ。少し面倒だと思った。嫁ぎ先には寄らず、まっすぐ家に帰るつもりだったから。それにたかが紙袋。

「退院する時にお使いになるでしょうから、置いておかれた方がよいですよ」

すると彼女は私の言葉を無視し

「桜子さんにあげたお着物だけは家に残っていますから。家に行くついでに持って行って頂戴。邪魔なのよ」

そう横を向いた。桐の箱に収まった古い昔着物の事だとすぐに分かり、反射的に

「いいえ、お母様」

そう呼んでいた。

「私は頂けません。あれは置いていったものですから。お嫁さんの加代子さんに差し上げてください」

むしろ要らない、そう思った。しかし

「今の嫁は古いしきたりを知りませんから。それにあの着物は私が逃えたもの。誰にやろうと私の自由です。何より、着てもらえないんじゃ、お着物が可哀相でしょう？　だったらあなたが着なさい」
彼女は言い放ち、ナースコールを手にした。

「次の検査がもうすぐ有るから、手水てすいに行かせて頂きます」
帰れ、と。

『ありがとう』

は最後まで無かった。

とぼとぼと歩き実家の呼び鈴を鳴らすと、彼女がまるで待っていたかの様に出迎えた。腕の中には片時も離さずあの子がいて
「そろいの帯揚げも、と電話が有りました。箱ごと持っていて欲しいって。必ず持って帰ってもらう様にと言われたんですけど、何の事が分かりますか？」

あやしなながらも困った風情で私を見た。着物に合わせた小物の事だった。義母はお着物一つ一つにこだわりが有り、この着物にはこの帯とこの小物を、と厳しく決めていたものだ。面白みが無く、融通が利かない。私は密かに呆れていたものだ。

「ええ、分かります」

押し入れの収納ケース。

「それも持って帰る様という事ですね」

彼女は頷き、私は心の中でため息をついた。

その古びた絹は老けていた。多分戦後の復興期に逃えた品物なのだろう。私が去った後も丁寧^{ていねい}に手入れをされていたらしく、櫃^{ひつ}を開けると目に染むような樟脳の香りが漂った。あの頃、受け取ったのは義理だった。家がらみの行事の度、機嫌をとるつもりで着たものだった。ここを離れた今にして思う。これはきっと彼女の青春だったのだ。これを着た私に、彼女は若い日を思い出していたのだ。

不思議な気分だった。古い紅型。江戸の下町でよく作られた伝統の染め。今では版も職人もいなく、望んでも手に入らない。それからお召し、黄八丈。(全て着物の種類)良家のお嬢様らしく、しつらはたつぷりと。お袖も長く、衿(袖の長さ)もゆったり。襦袢もお揃い、帯もずらり。薔薇に童子におしどり。みんな軽やかに笑っていた。こうやって手にしてみるとよく分る。この艶、重み、そして技術。その当時は最高の贅沢品だったのだ。そしてきつと義母にとつては今もお。

荷物をまとめ、発送の伝票を書き玄関に置く。帰り支度を終え、暇^{いとま}を告げる間際、私は彼女が存在に耐えきれずこう聞いていた。

「ねえ、怖くなかった？」

突然の質問に彼女は動じなかった。それどころか、何を問われたのかすぐに分かり

「私達の子だから」

そう答えた。その子はとてもいい子で

「だあ」

と笑いながら抱っこする母親の胸をつかんだ。

“ おっばい ”

そう言っているみたいに。

「分かっても、産もうつて、みんなで決めたんです」

その表情には決意のようなものが見えた気がした。その時どこかで携帯が鳴り、彼女は素早くそれに出る。

「うん、大丈夫」

口の端がレシーバーに向かつて微かに笑った。

「落ち着いてるから。孝ちゃんもいい子にしているよ。それでね」
ちらり。視線をこちらに向けた。

「桜子さんがヘルパーさんの手配、してくれたから。これから契約に来てくれるんだって。早速今日からお願いできるよ。だから身の回りの事は大丈夫、安心して」

夫からだと分かった。いや。元夫というのが正確だ。

「お母さんの所寄ってから帰るの？ うん、いいから、謝らなくても平気。でも夕ご飯は買ってきて来てもらえる？ 無理しなくて良いよ。

“春の行楽弁当”？ フェアしてるんだあ。ちよつと楽しみ」

電話の向こうには、私の知らない男の姿が覗き見え、失礼と分かっている。

「あなたも、無理、しないでね」

聞こえたかどうかは分からない。それだけを言っただけで家を出た。

タクシーに揺られ長い道を。私は引き返す。並木の両脇の桜はほころび始め五部咲き。一番良い季節。まるで雲の上を滑っているようだった。

彼が男じゃなかったんじゃない。私が彼じゃあ女になれなかったのと同様、あの人も私じゃ男になれなかったのだ。

もしかしたら私は負け組なのか。互いに育つ未来を描けず、完璧にでき上がった既製の男を求め過ぎたのか。厚みのある真ちゃんの背中を思い出しながら、不思議な感触に落ちていった。

どこかで微かに桜の香りがした。

第十一話 深紅の衣

次の日の早朝、二つの大きな段ボール箱が玄関に届いた。中身が分かつている分、開けたくないと思った。封を切ったら最後、見ないわけにはいかず、手入れをしなければいけないから。でも、今日は晴れ。こんな空の青い日に古着物に風を通さない手はない。庭では桜の枝がざわざわと揺れていて、意気地の無い私をあざ笑っているかのようなだった。仕方がない、私はカッターを手にとった。陰干したらそのまま今日中に仕舞うのだと心にそう決めて。

広げた着物の枚数はざっと二十着、全て義母の見立てたお品物。居間はみるみるうちに錦の波で埋め尽くされ、色とりどりの刺繍や絞り（着物に模様を入れるために技法）の咲き乱れる様子はまるで花畑の様。その最後、

「何だったのかしら、これ」

箱の一番下から取り出したたとう紙は、実は10年間で一度も見た事がない品物だった。施された四君子（梅・蘭・竹・菊の四つを指す）の透かし文様が

『私は特別』

と主張していて、記憶に残っていない事を不思議だと思った。その表には柏木敬子の名前が朱で消され、

“佐藤桜子様”

と義母の筆で私の旧姓がくつきりと書かれており、間違いなく私宛。昨日それを見た時いぶかしく思ったものの、つまらない押し問答をするのも嫌でそのまま段ボールに詰め込んだのだった。そして多分中身は私が袖を通さずに終わった、最後に仕立てをお願いした江戸小紋だと思いながら紐を解く。しかし

「あっ！」

私は目を射抜いたその色合いに、思わず声を上げていた。中から出て来たのは紅花で染められた真紅の腰巻き。弾ける様に浮かんだ言

葉は

“ 女の象徴 ”

ぶ厚い生地には鳳凰の底模様。なんて豪華なんだろう。私が持っている紅絹^{もみ}の腰巻きが、ペーパーナプキンのように安っぽく霞んだ。まるで吉原の花魁が使っていた、そう言われても驚かないほどのつちりとした、ベルベットの様な肌触り。織りすらも詭えものだと言われても驚かない。有り得ないほどの存在感。

それを内に秘めるかの様に纏う、その映像を。女の肌に乗り、滑り、絡み合う感触を、素肌の温かさと弾力と絹のそれが一致する瞬間を閃光の様に感じた。

「義母様……」

突風が吹き、家の梁が微かに揺れた。庭先の桜の花びらがふわり、窓の隙間から入り込み目の前をよぎる。

亡くなった時、棺に入りたいもの、特別なもの。もしこれが自分のものだったら、私はどんなに豪華な留袖よりも辻が花の振り袖よりも、これを持って旅立ちたい。そう思えるほどの深紅だった。

何故あの人はこれを私に託したのか。こっそりと人目につかない様に。その答えが怖かった。きっとあの人は気づいている。私がその意味に正解する事を。

悶々としながらもその晩は仕事で。閉店間際、私は一人のところを店長に呼び止められた。

「軽く飲みにいかないか」

なじみの客が誘ってくれているという。その向こうでひょいと私に向かつて頭を下げる影が有った。ピンクのロレックス、40代前半、手広くお店を経営していると。

“ 事足りている男 ”

だと思った。

これだけ男が嫌いでありながら、私はよく

『男好きするね』

なんて愚にもつかない事を言われる。多分今夜もそうなのだろう。

お酒は口実、目当ては体。だから暗い店内で横に座る彼の薬指の指輪をそつと指先で撫でながら

「ですけどね、私が欲しいものっておやすくはないから、ね？」

さざめく店の中、目を伏せて、相手を覗き込む様に。こんな私だからなのか、男をいい様に扱おうと思えば扱える様になっていて

「何かな？」

ほら、喰い付いて来た。

「言つてごらんよ」

自信ありげね。耳元に唇を寄せると、目の端で彼の頬が弛んだ。

「・・・赤ちゃん」

啞然と固まる表情を見ながら、正面まで体を戻した。

「いやあね、冗談よ」

動揺する間も許さず、微笑みながらそう言つてあげる。馬鹿ね、見え透いているのよ。

「ご免なさいね、驚かせた？」

みんなが笑つてその場を取り繕う。他のホステスさん達もすぐに全てを忘れさせてくれる。でもね、彼と私の間には見えない線が敷かれたの。

いとまを告げる私に送ると言つた彼は、一言の断りですぐに身を引いた。

「私がいなくても、楽しく過ごされてね」

夜は長いから。

昨日炊いた筍を摘みながら空をみていた。薄曇り。いつそ泣いてしまえば良いのに。縁側はひんやりしていて、それでも慣れないウイスキーで体は温まっていた。口の中には春の灰汁あく。眠れなかった。風が吹く度、木の枝がさざめく。ざあつ……ざあつ……。ずいぶんとほころんだ花の間、はらはらと、はらはらと。

「あつ……」

もう、散る。まだ、満開じゃないのにね。

「季節が変わった」

星空を見上げながら先日 of 彼は言っていた。

「オリオン座の位置が変わったから、もう、春だ」

そんな事を言われてもピンと来ない。星なんて、みんな一緒。

「桜子には分からないかな？」

ええ、そうよ。

「分からないわ」

私に分かる事なんか無い。そんな会話を思い出した。でも、確かに、季節は、変わった。

世代が変わる様に。あの義母の女の時代が移ろった様に、私も終わる。

心の中で真つ赤な腰巻きがはためいていた。それはあれほど艶めいていながら、子供のおしめの様に小便臭く、若い頃はさぞ美人だったあの人を、まるで童女の様に思い出させてくれた。

十二話に 続く

第十二話 既製品

その晩は彼女の

“ 夢 ”

を見た。

優しい夫。後妻とはいえ、大切にされ。芝生の庭、テーブル、温かい日差し、やわらかな笑い声。いつしか膨らみ始めた腹を、先妻の息子が愛おしげにそつと撫でる。

「僕、妹が欲しい」

やがて

“ 娘 ”

が産まれ、私は義母の腕に抱かれながら菩薩の様な彼女の顔を仰ぐ。そこにやって来たのは

「おばあ様！」

仔犬の様に弾む小さな子供。

「こら、孝ちゃん、駄目じゃない」

叱りつける若い母親と、その横で困った様に母親と嫁の顔を見比べる夫の姿。

「あらあら、良いですよ。子供は元気がなくつちゃね。私の子供達も、みんな小さな頃はやんちゃだったのよ、ね、桜子さん」

彼女は目尻を下げながら私に微笑む。その様子をもう一人の私の目が庭の木の上から眺めていた。

どこで歯車が狂ったのか。せめてもと、義理の息子の嫁に夢を託したはずが、現実はこの私。絶望的だった。

彼女の夢は、他人に評価してもらえる幸せだと私はずっと思ってた。

『あなたは幸せね、羨ましいわ』

でも真実は、心のままに生きたかったに違いない。

『子供のできない事がなぜそんなに悪い！』

『私だつて幸せになりたい！』

『子供を産まなくても、私はオンナ！ オンナなのだ！』

激しく叫びたかったに違いない。今の私にはそれが分かる。それができなかったから、私に辛く当たったのだと。私達は似た者同士。そう、だから彼女も苦しんだ。私を助けてあげられない自分と、自分を許してあげる事のできない自分。行き場なく、散るも許されず立ち枯れる。あの人は自分の人生にそれを望んだ訳ではなかったのに。

だから、惑わされるな。彼女はあの真紅の腰巻きにそう込めて、私に贈ったのだ。自分の様に他意に操られ、内に秘めたまま腐り堕ちるなど。

今日のパートは昼番も有り、朝の１１時の出勤に合わせ家を出た。玄関を閉めてすぐ携帯の呼び出し音が鳴り、慌ててバッグの底を探しているうちにそれは切れ。再び鳴った時にはメールに切り替わっていた。

『８時に会社を出れる』

たったそれだけ。だから何？ そう言いそうになりながら、顔の一部は微笑んで、携帯を握りしめていた。本当は待っていたから。彼からの連絡も、また寄ってくれと言う約束も。私も今日は八時に仕事上がる。だから今晚は真鯛の塩焼きにしよう。それから菜の花の辛子あえ。胃もたれしない様にさっぱりと。アサリの吸い口にグリーンピース御飯を添えて。材料は昼休憩で買ってくれば良い。買って来た材料は板さんをお願いして冷蔵庫の隅に置かせてもらう。そんな事を考えながら道を急いだ。

この日、お店は昼から混んでいた。外人の接客でやって来る人も多く、何かと手間を取る事が多かった。それでも私は不思議なくらい心軽やか。見覚えのあるピンクのロレックスがやって来ても気にしない。忙しい分、時間の経つのが早く、嬉しいってそう思った。

その晩、帰り道で一緒になり、彼は私の荷物を持ってくれた。

「貸せよ。重いだろ？」

「ん、大丈夫。こんなの平気」

そう言ったものの、顔をしかめた真ちゃんを見て

「じゃあ、お願いね」

私は素直に食材の入ったエコバックを手渡した。

「ほら、重いじゃないか」

彼はしてやったりという表情で私を見下ろし、私はそんな彼の一面を笑った。

彼は昔から箸使いの上手い男だった。

「お父さんの状態はどう？」

鯛の骨を丁寧剥がし、程よい大きさのそれをぱくりと口に放り込む。

「食べれる様になったわ。まだお粥だけど」

そう返事をし、自分に酒を注ぐとすると、

「後におけよ」

彼は私の杯を取り上げた。

「鬱陶しい人ね」

言いながらもその言葉に従う。確かに、後が良い。さすがに私も歳だから、毎日酒浸りじゃ体が持たない。だからいざその直前に、温まった方が良さそうな気がした。

「もうすぐ退院か」

それはまるで聞かせようとしている独り言。

「俺もこの家に入入りしづらくなるな」

それも良し。私は薄ら笑いで応えていたに違いない。だって、そうでしょう？ これは

“ 情事 ”

なんだから。

彼は例えるなら、プレタポルテ。デパートの一角に展示されたトップブランドの高級既製服。だから一着いくらの量販店のレディメ

イドとは訳が違つ。吊るしのスーツでも高級品は高級品である事に変わりなく、易々と手には入らない。惚れ込んだじゃいけない、深入りしちゃ、駄目。私にはその価値が無い。結局は夫を一人前の男に仕立てる事もできず、尻尾を巻いて逃げ出した女だ。だから

「敷居、高くなるわね」

つて距離を置く。

「ま、その時はその時か」

この人は私の言葉なんか届いていない風体で、

「お代わり」

茶碗を差し出し

「三つ葉多めに」

子供じみた事をリクエストした。

「もう、満開か」

縁側で二人もたれ、母の桜を眺めた。月が蒼く、重なる枝振りに影を作る。

「なんて綺麗なんだろう」

男の口から言われる言葉じゃない気がした。

「桜子はそう思わないのか」

ごろりと横になり、天を見上げ、太ももの上から私を見上げた。

「お前も綺麗だ」

思わず顔に血が上ったのが分かった。

「なっ・・・!」

言葉に詰まり口元を被う私を、くすくす笑う音が追いかける。

「それって、何よ」

馬鹿にされている気がした。いたたまれなかった。

ねえ、気づいている？ 私たちは軀だけの関係なのよ。好きだとか、愛しているだとか、これは感情のない関係。だから、恋人同士の様な会話は嫌い。

「何怒ってるんだよ」

むくりと起き上がり、音も立てず首筋を摘まれた、唇で。私は慌て、膝が崩れ、横に薙^なぐ。

何かがせり上がってくる。足の指先から、付け根に向かって、じん、じんと。

「お酒」

思わずそう言って逃れ、瓶に手を伸ばす。

「止めるよ」

意外なほど強い力でその手首をつかまれて

「酔わないと、駄目なのか？」

そう聞いた。頷く訳にもいかず、その手を緩め。……私は自分の腰巻きを古いタンスに閉まってなんて置きたくなかった。

「気のせいよ」

彼の首筋に巻き付けた。

“ 素面（しらふ） ”

を

“ 怖い ”

を悟られぬ様。

服を着たまま押し倒された。引き抜かれ、たくし上げられたブラウスの中に男の頭が揺れていて。

庭先の塀の向こうは竹林。

「声、出しても良いよ」

柔らかく彼は命じた。

言いなりにはなりたくなくて。噛みしめた下唇を彼の指が解きほぐした。それはぬるりと口の中に滑り込み、ゆっくりと齒列をなぞ

る。思わず吐息が漏れ、開き、向かい入れ舌を丸めてすすり上げた。彼の指先は彼の味がする。少し、塩辛い。

それを見つめる視線を感じるから。舌だけを残し、頭を引いた。太かった糸が細くなり、途切れ。彼の指と私の顎を汚した。もう一度、音を立てて、しゃぶる。見せつける。ちやぶちやぶって音が、麻薬みたいに頭の奥に響いていて。いつの間にか両の指を彼に添え、必死になって吸い付いた。頬がかくんと瘦けて、いやらしく。

彼のどこが好いかと問われたら、迷わず答える。指、と。太くこつこつしていてしなやかで。だから、これは、彼だ。

吊るしてもかまわない。フィットする、肌に馴染む、何よりも、好い。いくら高級で手が出せないと知っていても、私には、合う、のだ。彼が欲しい、彼が欲しい。例え一瞬の快樂だと分かっている。てさえー夢中だった。

第十三話へ 続く

第十三話 面（おもて）

縁側の床が微かに軋む。服を着ているから、下になった背中はさほど擦れず痛くない。それでも彼は体重をかけず、唇の一点で交わった。

「桜は、美味しいな」

胸元の響きが体中に染み渡る。

「桜餅に、桜鯛、桜えびに、さくらんぼっ」

「食いしん坊」

馬鹿馬鹿しい言葉遊びについ笑いながら応えてしまい、私達はまるで子供のようにだと思った。でも次の瞬間

「それに、桜子」

不意に

「桜貝」

私の両足は高く持ち上げられ、その股を割られ、朧な月の光を浴びた。恥ずかしさを隠し

「食べ物じゃ、ないっ」

思わず抗ったものの、彼は、

「いいじゃないか」

笑いながら私の全てを曝し上げ

「桜子はどこもかしこもピンク色だ」

舌なめずりをした。

「ここも、あそこも」

そして指が這う。芋虫の様にじりじりと迫り上がるたくし上げられたスカートのその奥。

「ここなんか」

その小さな音に

「奥まで」

全身が桜色に染まる。血が流れ、火照りーー絡めた。足、指、軀。

ああ、そして最後の一つを。???今私は生きている！

服を脱ぐのもどかしかった。開けられた胸元と、彼のベルトのバックルのカチャカチャとなる音と、荒い吐息。手首のボタンも外せない。擦り合う肌の隙間と、彼のワイシャツの滑らかな感触。私の右足にはストッキングとショーツが引っかかり、大きく広げ、空を仰ぎながら彼の背中に巻き付いて。中身の無いストッキングの片側は、さながら帆船の帆のように彼の後で揺れる。

やがて男の激しい鼓動が私を打ち付け、まるでセックスを覚えたての若者の様な情熱で私達は番^{つが}つた。

今まで観察するに、この男は避妊という事を全く考えていないらしい。事が終わり、ゆっくりと引き抜かれた彼の後、服を汚すのは嫌だからとそろそろ動いてスカートをずらすけど

「あつ！」

結局は無駄な努力で。とろりと溶けた情熱がまるで生き物のように私の体から流れ出し、太腿を這い、床とスカートの際^{きわ}に染みを作った。着ている服が洗濯機で洗える服で良かった。そんな風に苦々しく思う私を、

「まあ、できたときはできた時だから」

彼の指は私の内腿をそつと撫で、

「もしかしたら、もうできているかもしれないじゃないか。だって、今更避妊しても、な」

見当違いの方向で笑った。

「とりあえず、この次の生理が来たら用意するから」

その一言を嬉しいと思い、同時に悲しく、私はうつむいた。

彼に人指し指と中指を摘まれて、引っ張られるように二階への階段を昇る。滴りそうな下半身を内股にして引き締めながら。

ドアも閉めず、立たされたまま、服脱がされて、

「綺麗だ。」

って言われ。それを本当だと思ったかった。こんなとうのたった女の体を。

窓には桜の花びらが舞い、吹き付ける。まるで吹雪。春嵐だ。銚かすがいも無く、しがみつける訳も無く、ひとひら、ひとひら、雑草を引き抜くかの様に木から離され。

ああ、明日朝には満開が葉桜に変わる。咲き過ぎた。

この人の望みはなに？ この関係を？ いつまで？ でも、それは本当に？ 答えが怖い。私の中の鬼がまた、縁に手をかけやって来る。とその時、

「集中しろよ」

唸っているかのような音が鳴り、

「そんなに下手か？」

不意に片手で顎を押さえられ、睨まれた。

「何考えてる」

心地よげに胸を蹴っていたはずの指が食い込み、

「前の男とは比べるな」

痛い、そう口元が歪んだものの、声は出ず。彼が何を言わんとしているのか遅ればせながら気がついた私に、まるですれ違つかのように「悪かった」

ため息が聞こえた。

「ご免、俺が悪かった」

ごろん。仰向けになり、もう一度、セリフとは裏腹な深いため息が聞こえた。

「敵わんよ」

二人の間に距離が空き、つむじ風が舞う。

あっさり見切られたと思った。いや、飽きられたのか。だから遠くへ蹴けたぐらわれていた布団を引き寄せ、私なりの虚勢を張った。

「帰れば」

と。その方が良い。背を向けた。

集中できなかった訳じゃない。それより、邪心に囚われた。やは

り、酒が抜けると夜は冷え込む、そんな女なんだ。

諦めかけたその時、

「嫌だ」

滑る様に入り込んだ腕が私を抱きしめた。

「ここが良い」

彼の火照りは収まっていて、ただ優しく

「追い出すなよ」

と呟いた。

明け方の夢は静かな能楽堂の上だった。老松の茂る闇の中、音の無い世界。どこからともなく灯された蠟燭の炎に、宙に掛けられた能面が照らし出される。白く、赤く、時に蒼く。その一つ一つを私は手に取り顔につけていく。

でも全部違う。私の

“顔”

じゃない。

正直、こんなものを美しいと感じた事は一度もなかった。表情の無いのつぺりとした白い顔、表面だけで薄ら笑いを浮かべる女の顔なんかは得にそう。糸の様に細い目は他人の心の内を見透かす様で寒々しく、中途半端に開いた歯の覗く口元は、言いたい事が有るなら言えよと言いたくなる。

奇天烈を狙った動物の面もそう。般若も然り。歪めた両眉に見開かれた瞳。でもよく見るとその寄せられた眉根は泣いていて……。

若い女の狂気。その根源は恋しい男を想って狂うの意。

私には想い焦がれる男なんかいやしなかった。薄情な人間には、鬼になれるほどの情がない。

その時、とくん、と心の底で何かが動いた。無かったわけじゃないと、何かが蠢いたのだ。そう、私の中の、オンナだ。

動揺する私の目の前に、不意にうつむいた般若の面が迫り上がってきた。その肌の色は黒々とし、剥き出しの歯に、ひひの様に粗野

な表情。

『鏡だ』

そう思った。これが私の本心なのだ。

人間らしく、恋を問うているんじゃない。もっと醜く、そして原始的。情さえも切り捨てようとする私。

『生きたい』

唯、それだけ。それを人の言葉で発する事のできない、もどかしくも愚かな。私は黒い般若だ。

本当は人になって求められたい。互いに与え合い、温かく。それができずに、鬼面になる。野獣になれば、感情を恥ずかしいだなんて思わずに済むのだから。

目が覚めたのは寒かったから。被っていたはずの布団は彼に取られ「全く」

そう言いながら私は泪を堪えた。体に回されている彼の腕だけは温かった。

十四話に 続く

第十四話 散る花

案の定、桜は散った。一夜で半分に。窓越しに見下ろす庭の地肌には、朝露で散った花びらが層をなし張り付き、入れ墨の様な文様を作っていた。

あれから私は眠れず、その上まだ5時だというのに彼は起きて出して、

「早いな、もう目が覚めているのか」

と何事も無かったかのように笑った。くたびれたシャツをズボンにたくし込みながら。

「ああ、俺はこれから一週間新潟だよ。全く人をこき使う」

そう言う割りに、疲れを見せるでもなく

「家帰る前に何か軽く食べれるものをくれないか。着替えたらずぐ新幹線だしな」

彼は私以上にこの家に馴染んでいた。

「まるで通婚かよいこんみたいね」

方眉を上げながらちやかすと

「まあな」

と答え、にやりと笑いながら

「男の本能ってヤツかな」

無精髭を撫でた。

「無理してまで来る必要無いのに」

二杯目の煎茶を差し出しながら愚痴を吐いた。すると

「そんな事も分らないのか」

呆れ顔が私を見ていた。

“何を”

私は問い返す事をはばかった。

その上、家を出るその間際

「お前は馬鹿だ」

彼はいきなり振り向いたかと思うと、パジャマにガウンの私を抱き寄せ、強く抱いた。そう、私は馬鹿だから……。独りよがりで世間知らずな馬鹿な女だから。身悶える私の耳元に

「どうして俺が前の二人と別れたか、教えてやるよ」

荒い息が吹きかかった。

「頭で考えたからだ。今のお前みたいに」

何を言ってるの？ 今更の様に慌てて彼を押しやろうとするけれど、その腕は堅く私を放さない。

「こいつと一緒にになれば社会的に安泰だ、とか、多分平凡だけど堅実な家庭を築けるだとか。これはこうで、あれはどうで。分析してタグつけて、良しって思ったからだ。言葉じゃ言えない気持ちに従ったんじゃないからだ」

私はぽかんと口を開けて彼を見上げていた。結婚には条件が付きものだ。どうしてそれが間違っているのか、彼の言っている事が分からなかった。それに私は頭で考えられる程、お利口さんじゃない。ましてや、真ちゃんと一緒になったらどうなるか、なんて、思いもしなかった。

「いや、分かってる」

彼は私の頬を両手で挟み込むと、語調を荒げた。

「お前が俺の名前呼ぶのは、イク時だけだって、気づいているか？」

「あっ！」

その言葉の恥ずかしさに思わず顔を背けそうになるけれど、彼がそれを許してくれず。

「たまには自分の本能、信じてよ」

彼の唇が私に触れ、それからもう一度キツく抱きしめられて……。

「また来る」

と去っていった。

その5日後の事だった。義母は精密検査が終わり無事家に帰った

と連絡をもらい、私はどこかほっと胸を撫で下ろしていた。

あの憎しみが、今の私には無かったから。よどみを抜け、小川のせせらぎに戻れた鮎のような気分とでも言っのだろうか。そして、電話越し

「良かったわね」

“あなた”

そう言いかけて口を閉ざし

『そうなんだ、さくら……』

彼も私の名を呼ぼうとし、互いに口をつぐんだ。おかしかった。ふたり、失笑に似た含み笑いを漏らしていた。

もう、私たちの関係は終わった事なのだ。それを証明できた気がした。

『君も、幸せになつて欲しい』

彼が言う。それは多分、本当の気持ち。

「ありがとう」

それも、本当。もしかしたら私たち夫婦は、別れて初めてお互いが分かったのかもしれない。

「あなたも、末永くお幸せに」

この日生まれて初めて、春の風をさわやかだと感じた。桜の散るを、良し、そう眺める事が出来た。庭にはピンクの波が泳ぎ、青葉が空に向かつて手を延ばしているようだった。

でもその気持ちは長くは続かなかった。その夜は曇りがちで足下がとても暗く、挙げ句に仕事が長引き残業になり、電車もまばらになつていて、かなり帰りが遅くなった。そして駅を抜けて歩く途中、後ろから照らされるフロントライト、減速、停車のブレーキ音。全身に緊張が走った。

いつもはわざと左の道を歩く。そうすれば運転席から遠いから。いざという時の安心の為に。道を聞かれるのすら、嫌だから。それなのに……。脇のすぐ近くでした窓の下がる機械的な音に鳥肌が立った。ポケットの中で携帯を持つ右手に力が入り、走る、心を用意

した。

知っている。逃げる、そう思った瞬間、絶対に迷っちゃいけない。もし誤解だとしても、そのおくれる1秒が、全てを決めるって。知っている。その瞬間、

「桜子！」

怒りに満ちた声が聞こえ、私は恐怖に目を見開き、動くはずだった体を止め彼を見た。

「そんなんだったら、仕事、

辞めちまえ」

彼は運転席の中から私の恐怖を見つめていて、拳げ句、私を罵った。

「脅かさないで」

止めようにも、声の震えは止まらずに。

「脅かさないで」

そう再び、気がついたら泣いていて

「仕事、辞めろ」

静かな声を聞きながら、抱きしめられていた。

「せめて夜は、な」

助手席に座らせられ、家の途中、あの公園の脇を抜け、一直線に家へと向かう。彼だけがスムーズだった。

家の鍵すらも言う事をきかず

「古いから」

そう言い訳をし、取り上げられて、ため息をつかれ。

「だったら、取り替える必要が有るんじゃないのか？」

彼の大きな手の中では、鍵すらもおもちゃみたいに見えた。

「疲れているの」

ジャケツトを脱ぐ私に

「良いよ」

彼は言う。何が良いのか分からない。

結局風呂場に連れて行かれ、二人で入ろうとする仕草に慌てた。

夫、いや、前の男というのが正解だろうか。それとも、ああそうだが、今は元夫もとふって。その、元夫、とも一度も一緒に入った事が無い。

「嫌よ」

そう逃げ出そうとし、

「いつまでたつても、子供だなあ」

と笑われた。

子供なら、まだ良い。彼に明るい所で肌を見て欲しくなかった。

もう、姥桜うばえん。酒も入らず、ましてや明かりの下で現実を見て欲しくなくて。

ねえ、気づいていないわよね。本当の私は、こんなに愚かで子供じみている。本当はね、セックスって、楽しめなくて、今まではお酒の力借りて勇気だしていたのよ。ねえ、辛いよ。これからの現実が、怖い。

手を引かれる。ねえ、私は……愛されているの？ でも、愛って、何？ あなたは何も求めないの？

私はあなた

に応えられるの？ かたがたが無い。モノでもない。ましてや、言葉でも無くて。

分からないから、辛くって、戸惑う私に

「良い子だから、落ち着いて。一緒に入るだけだから」
その言葉に従い。

きつと彼は詐欺の才能が有るに違いない。騙され、揺られ、結局生温い湯につかりながら、溶かされた。でもなぜか、当たり前のように騙される自分が嬉しかった。

ぐったりと座らせられた私の髪を彼が洗う。

「何だか、好いね」

その、好いって事が悪いって、彼は気づかない。

桜ノ宵二 十五話につづく

第十五話 誤算

その夜もさんざん嬲られた気がする。それは、いつも通り？ いえ、違う。彼から伝わる律動は、あまりにも激しすぎ

「真ちゃん、許してっ！！」

いつかそう叫んでいて。

全く、この男は何で出来ているんだろう。全てが終わった後、

「メール送ったけど、見てないんだな」

なんて、まだ息の荒い私に話しかけ。

「知らないわ、そんなの」

きっと私は恨めしそうな顔を

していたに違いない。彼はむっとした表情を見せたかと思うと、

「そうか」

なんて子供の様に背を向けて、やがて静かな寝息をたてていた。

その次の日の朝

「起こしたか？」

まだ五時前だというのに起きだそうとした彼は、私の寝ている布団に向かって振り返った。薄らと目を開けた私を確認したその声は、昨夜から一転し、優しく

「ご免」

柔らかく笑ったかと思うと、

「そうだ。起こしたついでに」

たった今何かを思い出したとも言つように呟くと、手早く服を纏い部屋を出て行ってしまった。しばらくして自動車のドアの締まる音が響き、戻ってきた彼は

「母が持っていけと」

鬱金色（赤みがかった黄色）の風呂敷に包まれたそれを私の目の前に無造作に置いた。

「これは？」

中身は多分、お着物だ。嫌な予感がする。でもなぜ彼のお母様から頂き物などするのだろ。布団で軀を被いながらおそろのおそろ手を近づける私の姿に

「見てみるよ」

彼はにっと笑ったかと思うと、躊躇する私の後ろに回り込み、両手を私の脇の下から前に通し、さらりと包みを解いてしまった。

「これは……」

思わず手に取る若草色のたおやかな肌触り。裾には作家ものらしく

“ 幸 ”

の落款（しるし。サインのようなもの）。

「茶席で一度着たつきり、宝の持ち腐れだって。桜子に着て欲しいから渡してくれて頼まれた」

盛装用の帯にはのつちりとした銀糸が織り込まれ、鈍い艶を放っていた。

「貰えない」

思わず声を上げた。これは宝石と同じ、財産だ。狼狽える私を彼はひしと抱きしめ、耳元で呟いた。

「お前の、汚したから」

その言葉にたじろいだ。初めての夜の事を言っているのだ。私は予期せず赤くなった。

「……そのつもり、だったから」

あの瞬間、快樂のためならば古い着物の一つぐらい、そう思ったのだったから。

「汚してかまわなかったの、安物だから」

でもこれは、母から娘に譲るもの。情事への支払いにしてはあまりにも高価で。

「これは、困る……」

彼が母親になんて言ってもらったのかは知らないけれど、簡単に手放せる様な品物じゃない。たじろぐ私の首筋に、彼の吐息が吹きか

かる。

「桜子の所へ通っていると話したら、持っていけって言われたんだよ」

それは衝撃だった。

「もしかして、おば様に私達の事を話したの？」

振り向き慌てるその口を彼が覆う。押し付けられる広い胸、まさぐる指先。

「話を！」

その声は彼の唇でかき消され……。逃げようとし倒れ、足首をつかまれ引き戻される。啞然とし見開いた目が、彼のそれと合い。指、彼の指に力が入り、じりつと引きずられ。擦れた背中にヒリリとした痛みが走る。

「桜子」

その名を呼ばれた。

「話は後だ」

つかまえている右手を持ち替えて、下から足首を持ち上げられ「――」。下着さえ身に付けていな、私の女が口を開ける。彼は足首をひねる。外側に向かって。視線が這って戻り、彼の赤い舌がちらりと覗き……。ぞわり、瞳を逸らす事なく土踏まずを舐めた。それから山蛭やまびるの様な生々しい感触で、ちゅいつ、ちゅいつ、ちゅいつ……。跡を残しながら、唇が私の中央に向かってせり上がって来る。

視線を外せない。その口元から、目元から。しっかりと開かれた目は、私の膣を通り、子宮を貫き心臓へと矢を放つ。私は恋矢れんしに貫かれ、その痛みに酔った。

小さく震える内腿うちももをそつと開かれ、柔らかくも充血した薄い皮膚を曝し、自ら餌食になる期待と恍惚を。痛むほど吸いつかれ、彼の唇は私の底をすくいあげ、井戸の奥から光を仰ぎ見るその世界からこの地へと解き放つ。

「来年の桜の季節に着て欲しいそうだ」

彼はもどかしげにそう言っていると、一度は着たはずの服を手早く脱ぐ捨て私に覆い被さった。

今更抵抗しようなんて考えられなかった。私は全てを忘れ、自分のオンナにしがみつきの、狂い咲き、舞い上がる。

遠のく意識、でも感触は水飴の様な質感を持ち、滑る。^{ぬめ}この手に取るうとし、ついと逃げ、そのくせどろりと肌に残りーそれは私にはあまりにも甘すぎた。

「もう、来ないで」

この時になってやっと、ヤバい男に手を出したって気がついて、明け方のまどろみの中にそう言っていた。本気なんか、なりたくない。男には聞こえたはずだ。だのに彼は私の長い髪をすき

「おやすみ」

とその先に口付けを残し襖を閉じた。

第十六話 女の周期

『二度と来ないで』

そう言ったのは私。そのくせ、心の中では彼からの連絡を待つ。数分毎に携帯の画面を気にする自分の姿を、一ヶ月前の私が馬鹿なだつて笑っている気がした。着信なんか無いと言うのに……。時の流れが変わり、壊れたメトロノームみたいだと思った。

彼はあれから言葉の意味を悟り、きっぱり別れを決めたのだろうか。私はそれが望みだったはずだと自分に言い聞かせようとしては、幾度となく失敗し、ため息をついていた。

本当は忙しく働いて彼の事を忘れられれば良いものを、生憎と今日の仕事はお昼だけ。しかも残業をするほどお店は混んでいなかったから、定刻できちんと上がる事になり。

「お先に失礼します」

なんて少し閑散とした厨房に声をかけ、新人の子がぎこちない着物のいでたちで行き過ぎる姿に背を向けた。

その帰り、道明寺を買って病院に寄った。昔から季節の甘物が好きだった父は、その可愛い菓子を目にしたとたん、さも嬉しそうに口元をほころばせたかと思うと、そつと悲しげに目を伏せた。

「先生がこれを食べても良いって許可してくれないと、さすがにまだその勇氣はないな」

と。体調を気にしているのだ。

「大丈夫よ、お父さん」

私はひとひらの懷紙にその柔らかな固まりを取り、

「先生に手術の後でもこれぐらいなら食べられるって確認してきたの。だから買ってきたのよ、ね？」

うつむく父の手にそつと乗せた。

「ほら、父さんの大好きな銀吾堂の道明寺だよ」

「ああ、そうだね」

父はどこで買ってきたのか分からないはずがないといった表情で、私を見つめ返した。

「ゆっくり食べれば大丈夫だから」

手元から立ち昇るのは、桜の葉っぱのほの苦く、若々しい塩の香り。

「ああ、美味そうだ」

父ののど仏がゆっくりと上下し、

「じゃあ、頂くとするか」

舌の先がひよりと笑った。父もこの季節にこの菓子が食べたかったのだ。そして私は、来年のこの季節、またこうして父に食べて欲しいと願う。

父が舐めるように恐る恐る食む姿をゆったりと眺めていた。それは遠い時代の小さな子供が、とても大事そうに菓子を頂く、そんな情景を私に抱かせてくれた。と、その時

「あつ！」

切り忘れていた携帯が静かな病室に鳴り響いた。

「ご免なさい！」

慌ててマナーモードに切り替えようとするけど、なかなか収まらず、結局着信のメールを開いて音を止める事になり。???嫌になる。

電源を切りながら、思わずため息をついていた。それは彼からのメール。

『今晚行くから。できたら飯が食いたい』
と。

結局この瞬間まで待っていた。約束は怖いと言いつつ、待っていた。この張りつめた緊張感を彼は知らない。本当は戸惑うべきはずの彼の方が図太くて、何事もないかのように振る舞っている。

“できたら飯が食いたい”

そう下手に出ているを装いながら、私が準備をしてしまう事を見透かしている。

「落ち着かないね」

父が心配そうに首を傾げた。

「何でも無いのよ。ただ、最近お客さんがしつこくて」

私はとつさに嘘をつく。すると父は表情を曇らせた。

「だから昼だけの仕事にしなさいって言っているじゃないか」

しまったと思い、

「ご免なさい。心配かけて……」

私は口ごもっていた。言い訳をするにしても、言って良い言い訳と悪い言い訳が有る。あんな事が有ってから、父は私の身の回りに敏感だ。その事を失念していたなんて。

こんな私でも父にとっていい娘でありたい、そう思う。なにしろ男手ひとつで育ててくれたのだ。いろいろ苦労も有った事だろう。それに再婚の話もあったのに受けなかったのは、私を氣遣ってだという事位知っている。だから安心させたくて

「慣れたらシフトを昼だけにしてみたらおうと考えてもいるの」

不可能と分かっているけれど、そう言っただけの様子を伺う。そんな私に突然父は

「恋人とか、いないのか？」

と言い出した。

「いたら紹介しろよ」

「嫌だ、父さん」

年甲斐もなく、そう言われるかもしれない。あの人の情熱を思い出し、顔に血が昇りしどろもどろになりながら答えていた

「馬鹿な事、言わないで」

と。ああ、ばてれしまっ、そう思い必死で誤魔化す言葉を探し

「それよりも」

父が気にしているはずの事を口にした。

「佐伯の伯父さまのお墓だけど、妙法寺に決まったそうなの」

すると父はすぐに話を切り替えた。

「おお、そうか。で、場所はどこに？ いや、まだそこまでは決まっていないか。でも上手くいけば、親族の墓の近くに場所を墓を建

てさせてもらえるかもしれないな」

辛い出来事なのに、父の目元には安堵の表情が伺えた。

「そうすればあいつも寂しくなくて済むからな」

そこは私達に縁の深い寺だった。父の両親の墓が有り、私の母が眠っている場所。でもとても人気があるから、墓を譲り受けるのにも順番待ちとの噂があったのだ。

「退院して落ち着いたら、みんなに連れて行ってもらおうか」

穏やかな笑顔に

「そうしましょう」

そう言いながらやせ細った父の手を握った。

「みんなで行きましょう。それにもう少ししたらおじさまが大好きだった花菖蒲が見頃よ」

墓に続く緑の下の日陰の道、湧き水のせせらぎ、紫色の可憐な花。

あそこは墓と言いながら清らかで、これからの季節は蝶が舞う。まるで生者と死者をつなぐ小道の様な風情を思い出しながら、小さかった事、真ちゃんに手をひかれ歩いた日を思い出し、かといってあの様な事は二度と無いのだと自分に言い聞かせる。

この日はまだ夕暮れにも早い時間に父に送られ病院を後にした。

あと2週間で父は家に帰れる。

「しばらく粥しか食っていないから、もう少し旨いものが食いたいなあ」

と言われ、

「とびつきり贅沢なお粥を用意して待つてるから」

と返し、手を振った。

退院祝いに、蒸しケーキを作ろう。春の花霞のようにフワフワとした優しい色に八重桜の塩漬けを乗せて。

その足で高校時代の友人と飲みに行った。彼女は卒業と同時に結婚し、私と同じ年だというのに今や三人の子供のママで、忙しくしているらしい。会うのはかれこれ二年ぶりだった。

「さくらは変わっていないねえ」

久々に会う瞳は少しふつくらしていた。あのころ彼女はモデルの様なほっそりとした体に長い髪で大人のフリをしながら、15歳も年の違う人に恋をしていた。危なっかしくも純粹で、

「好きな人、いるから」

そう言っただけで告白して来る男の子達をなぎ倒していた。結局その彼をものにし、今日に至るのだけだ。

お互いどんな風に暮らしているか、彼女は子供の話をし、私は離婚の事を話し。彼女は頷きながらも

「で、今は恋してる？ 何だか雰囲気変わったよ？」

不意に頬杖をついて私の顔を覗き込んだ。

「分かるんだから。隠しても無駄」

その声には確信が有って、女の直感って侮れないなっと思う。

「恋愛って周期があるんだってよ。つき合い始めて6ヶ月が別れ時とか、反対に別れて6ヶ月がつき合い時、とか。離婚して丁度一年じゃん。今がそれじゃない？」

「そんな、だって、出会いが無いでしょう？」
はぐらかそうとするも

「まあ、さくらんはこういう事にアグレッシブじゃないから、もしかして、初恋の彼？ じゃない？ ばったり再会したとか」

その言葉にかつと頬が赤くなった。

「嫌だ、何言ってるのよ」

「恥ずかしいじゃないでよ」

友人には隠せないらしい。だから

「すこし、ね」

と打ち明けた。

「将来は分らないけど」

そう言いながら、本音が出る。

「だってほら、私、子供産めないから」

子宝に恵まれた瞳。だからこの時も、今までのみんなと同じ様な反応が返って来ると思っていた。

『そっか』

つて、沈黙。さりげなくそらされる話題。

でも彼女は違っていて

「だからって諦める理由なんか無いんじゃない？ それに絶対駄目
つて限らないんじゃない？ 相手が変われば、色々違うしさ」

明るく、でもしたたかに微笑んだ。

「私はね

“若さゆえ”

つての有りだとおもうけど、あの頃そんな事全く考えてなかったよ。
ただ彼が好きなだけ。好きで好きで、大好きなの。子供が出来る出
来ないじゃなくて、彼が欲しかったの。正直言っちゃうけど、私あ
んまり子供好きじゃなかったし、産まれなかったらそれまでかなっ
て。将来の事なんか考えなかったよ」

そう言つて、あの当時どうやって自分の

“おじさん”

を口説き落としたか、今までは一度も教えてくれなかった衝撃の真
実を聞かせてくれた。

久々に驚いて、久々に笑った。信頼できる友達って良いって思う。
でもきつちり28日の周期が3日遅れている。その事は、話せな
かった。

桜ノ宵二 続く

第十七話 延縄（はえなわ）

その週末。金曜の夜11時。酒を飲みたくても飲む気にもなれず、ひとりテレビを見ていた。

ぼんやりと。この次彼に会ったらなんて言おう、そんな事を考えて。

『何しにきたの？』

『お終いつて、言ったじゃない。』

それとも

『会いたかった。』

？

彼に側にいて欲しい。本当は、好き。でも、出来ないから。

私たちはある意味適齢期で、親族が近い。その分期待が怖かった。もうこれ以上、裏切れない。

チャイムが鳴り、玄関を開ける。

「よう。」

と。少し伸びた髭。差し出される紙袋。

予感是有った。

そして結局、やって来た彼の顔を見たら何も言えなくて。

「飯、食ったよな？」

そう問われ、頷く以外に出来なかった。

紙袋の中には、蒲鉾。

「明日の朝、わさび醤油で。」

それは、目で分かる。細められ、物欲しげに。でもこの夜だけはしたくなかった。だからにじり寄る彼に

「嫌。」

を告げた。この奇妙な体調を知られなくなかった。

「俺に飽きた？」

パジャマに手をかけようとする指を払い

「あなたはそればかりね。」

振り切る。

「したくない気分つてのが有るの。今は、駄目。」

露骨に表情が曇り

「分かったよ。」

諦め顔が背を向けた。

彼が風呂へと立ち上がり、洗い物をすませた私は先に二階へと上がった。

彼はどうするのだろう。結局私の布団ぐらいしか寝る所は無いのだから。もしかしたら勝手に奥の間の押し入れをかき回すかもしれない。それとも、帰る？

彼に任せる、彼次第。そう言いながら、たいした選択肢も与えず私は投げ出している。きっとそれは

“ 本当はここに居て欲しい。”

それを言葉で言い表す事の出来ない、悪あがき。

冷えた寝具。霊廟みたいに温まらない。

この季節はいつもそう。一度温かくなったかと思うと、過ぎに転落し冬へと逆戻りだ。

予期していても、身にしてみた。

その時、

「早いな。」

音も無く。実体が横へと滑り込んだ。それが当たり前かの様にひと

つしか無い上掛けを引つ張りながら。つられて転がり。

そこには洗濯の匂いのするシャツと温かい軀。

「なあ、桜子。父さん落ち着いたら、俺のマンションに来ないか。」
まるで おやすみ とでも言うかの様にそれは聞こえた。

「冗談でしょう?」

丸く見開かれた目が

「お前は今まで冗談で一緒になるうって言われた事が有るのか?」
と返すから

「馬鹿じゃないの。」

吐いていた。

もう、いけない。だから言ってしまった。

「私、石女なのよ。知っているの?」

本当は知らないって、そう思っで。知らないでしょう?だからそんな風に言えるのよって。それは牽制の言葉のはずだった。

私を抱いていた腕が弛む。船を留めていたロープが解けるかの様に、あっけなく。

その沈黙にほらっと思っだ。あなただっで親の期待にんえなきやいけないっで思っでしよう?それからいつかは自分の子供が欲しいっで。だっでね、こんな私だっで、思っんだもの。

軽蔑を込めて

『ほら、ごらんなさい。』

開いた唇を、彼が遮った。

「知っでいる。」

フリだと思っだ。この場を誤摩化す言ひ逃れだっで。でもそれは

「お父さんから聞っでいるから。」

の一言で覆された。

頬を撫でる彼は笑っでいて。

今、彼はなんと言っだ?父と言っだ?

頭の中で警鐘が鳴った。何故ここに父が出てくる？父は何を話したの？そしてあなたは？

漠然と、悔しかった。

本当は知られたくない女の秘密を、男同士で勝手に共有しているなんて。惨い。

その上父を引き合いに出し、私を追い詰める気なのかと。

青ざめたのが自分でも分かる。

それを

「だからってお前に価値がない訳じゃないじゃないか。」
そんな言葉が追いかけてきた。

「俺が欲しいのは子供じゃない。桜子だ。」
言葉が詰まり、どうして良いか分からず首を振り。

「お前は子供を産む道具じゃない。分かってる事じゃないか。」

「嘘だわ、そんなの。分からないわ。」

夢を見るのは辛いよ。

「信じないんだから。」

鬼、鬼、鬼。能の面は女顔が多いから。そして私は、鬼面の般若嫉妬する女。でも、誰に？誰に嫉妬する？そう、それは、幸せになるはずだった、私の姿。

全て、幸せ、なんて、夢物語。

「お前が気づいていないだけで、みんな喜んでくれている。」
「分からないわよ、そんな事。」

突然、柵の中に追い込まれた事に気がついた。逃げ場が無い。

「大丈夫だよ、桜子。」

再びの抱擁は柔らかかった。

「ゆっくりいこう。今までが急ぎすぎた。」

私は現実が怖い。

二人初めて

“ 服を着て ”

一緒に夜を越えた。パジャマの私と、下着だけの彼。

桜ノ宵二

つづく

第十七話 延縄（はえなわ）（後書き）

次話が最終話になります。

第十八話 八重桜（前書き）

ハッピーエンド ハッピーエンド

第十八話 八重桜

まんじりともせず。話し合う言葉が見つからず。光る月を見ていた。でも最初に口を開いたのは彼の方で。

「なあ。」

その声も眠れない夜を過ごしていた。

「お前の事、逃がす気ないから。」

その決意と自信がどこから来るのか分からない。私には恐怖しか無いつて言うのに。

「相性がいい。食い物も、酒も、肌も、生活も。だから、お前の父親にも俺の家族にも話しをして、逃げられない様に柵、作って追い込んだんだろうが。」

静寂な夜に彼の声だけが鮮明だった。

「本当言つとな、お前を葬式で見た時、心臓が鳴った。何かがおかしいって。親父の葬式をしているはずなのに、なぜか自分の葬式のような気がして来たんだ。どうしてだろうな。俺が死んでお前が泣いているような錯覚を起こした。ああ、お前が俺の為に泣いているって。現実じゃないのは分かってるけど、それが哀しくてな。だからいつその事、桜子と一緒にになりたいって思ったんだ。そうしたら、運命が変わる気がした。お前は俺を見送る為に泣かなくても済む。俺たちは二人で笑って時間を稼ぐ。若い未亡人が喪服を着るんじゃないって、お互い寿命を全うした死を迎える。不謹慎かも知らないが、あそこに有った

“ 死 ”

って現実から逃げ出す為には、お前をあそこから連れ出す必要が有るって。俺をお前の中に埋めて、生きているって、二人とも生きているって叫びたかった。だから二人一緒に年取ろう。残り40年少しの人生、楽しまないか。」

静かな声を裏返し、いきなり起き上がると私の顔を覗き込み。

「お前は俺を一人で逝かせたいのか。」
と低く。

“ なくなる。”

その悲しい現実が目が覚めるようだった。

「嫌だわ、そんなの。」

彼の為の喪服だなんて。

「勝手に一人で逝かないでよ。」

そんなものを持ってなんかいたくない。

「嫌だから。」

必死でしがみついていた。

「許さないから、そんなの。」

彼のシャツの胸元を握りしめていた。

「それだけは、嫌だから。」

太くて繊細な指先が髪の毛をすく。ため息の様な深呼吸と

「だったら言う事聞けよ。もし怖いんだったら、すぐに籍を入れなくても良い。一緒に暮らす事から始めよう、なあ。」

包む様な、含んで聞かせる様な声色だった。

その優しさが、春の嵐の様に私の中を吹き荒れる。

「済まない。」

その口調はちつとも済まないなんて思っていなくて。でも
「済まないね。俺はお前が欲しいんだから。」

「真ちゃん。」

こんな私でも、良いの？

「この歳でそう呼ばれるのは恥ずかしいな。」

「じゃあ、なんて？」

少し考えるそぶりの後

「真さん、は？」

そう言いながら頬を赤くした。

「真さん。」

初めてその名で呼んだ。

「真さん。私でも良いの？」

とても甘かった。

「お前が良いって、言ってるだろうが。」

再び抱きしめられ、彼から体温をもらい。

緩む。

雪解けの様な、照らされる様な、ぬくもり。

遅い、春だ。

彼が身じろぐから、その変化を軀で感じ取っていた。

「なあ、桜子……。」

と言いよどむ。到底3歳も年上とは思えないその口調。思わずくすりと漏れてしまい。

「なんだよ。」

その顔は笑いを堪えているかのようにだった。

「なんだよ。」

と。

5日、遅れていた。

「良いけど……今晩は優しくして。」

この夜だけは、大切に抱いて欲しかった。

「お望みのままに。」

まるで初めてみたいに扱われ。彼の名を呼びながら、静かに静かに闇の中へと堕ちて行った。

ゆめつつ 夢現。 囁かれた。

「もうすぐ家の八重桜が満開だ。」

そう、彼の実家には見事な八重桜が有る。遅咲きながら色も濃く。鮮やかな色彩が葉の緑に負けないくらい艶やかで。ころんと丸いその形は日溜まりの子猫の様に愛らしく、そのくせ熟れた様に重いから、たわわに実った果実の様なその花は、風が吹くたびに鈴の様にしなる。

その姿を思い出し、うつとりと微笑んだ。

現実を美しいと思った。

「あれを見るたびにお前の事を思い出すんだ。今年の桜は母に漬けさせよう。1ヶ月も有れば漬け上がるから、百か日を過ぎる頃には出せる。」

まるで女の様な言葉。いぶかしく思い首を傾げると

「さんざん考えてきた。俺なりのくどき文句だよ。結納の席で桜湯で飲もう。」

そのくせ私の返事すら聞かず。満足そうに微笑んで、穏やかな寝息をたて始め、その心地よいリズムが私を眠りに誘い込んだ。

その夜の夢は、桜。花開き、実を結び、やがて根を張り大地に深く根付く。花びらは私の上に楔みてぎのごとく降り注ぎ、欲を無に浄化してくれる。そんな夢だった。

第十八話 八重桜（後書き）

ここまでおつき合い頂きありがとうございました。

書き終わってから言うのもなんですが “ 女のエロス 始めました ”

とかうたっていたにも関わらず、見切り発車で自信が無かったんだ
ったりして・・・。

とりあえず 自分なりに エロス 意識してみました。

ま、それなりに好いんじゃない、と思ってもらえると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0007e/>

桜ノ宵二

2010年10月10日16時00分発行